

元曉『法華宗要』訳注(2)

金 炳 坤 (慧鏡)

§1. 序 論

本稿は、『大学院年報』に掲載した拙稿「元曉『法華宗要』訳注(1)」の続きである⁽¹⁾。

本訳注は、天下の孤本として現在仁和寺に伝わっている元曉の『法華宗要』(以下、「原本」)を『大正新脩大藏經』以降はじめて用いた研究である。

ここでは、(1)『法華宗要』の「六門分別」のうち、「第二弁經宗」の訳注(訓読訳)を掲載し、その思想・歴史上における特質を考察し、(2)さらに書誌学的な分析を通じて、元曉著述の著述年次並びに先後関係について論じ⁽²⁾、『法華宗要』の著述年時に関する新知見を提示することをその目的とする。

なお、「第二弁經宗」の科段分け及び概要(論点・論拠)については、以下の【表Ⅰ】を参照されたい。

【表Ⅰ】「第二弁經宗」の科段分け及び概要について⁽³⁾

科段 \ 概要	論点	論拠(列挙順)
2. 弁經宗	⇒ 一乘実相	
2-1. 能乗一仏乗人		
2-1-1. 三乘行人	⇒ 皆為仏子 → 悉是菩薩 → 以皆有仏性当紹仏位故 → 皆当作仏	『寶雲經』、『寶雲經』、『妙法蓮華經』(以下、『妙法華』)「方便品」、 『妙法華』「譬喻品」、 『妙法華』「方便品」、 『妙法蓮華經論優波提舍』(以下、『法華論』)
2-1-2. 四種声聞		
2-1-3. 四生衆生		
2-1-4. 無性有情		
2-2. 一乗人所乗之法		
2-2-1. 一乗理	⇒ 一法界 → 法身・如来蔵 → 如来法身如来蔵性～一切 衆生平等所有～能運一切同 帰本原 → 無有異乗 → 故 説此法為一乗性	『大薩遮尼乾子所説經』、『合部金光明 經』、『法華論』所訳の『法華經』 「方便品」、 『法華論』、『法華論』

⁽¹⁾ 拙稿 [2011]「元曉『法華宗要』訳注(1)」(『大学院年報』28) 参照。

⁽²⁾ 以下本稿では、元曉の現存する二十二部の著述のうち、著述に真偽の問題のある『遊心安樂道』、断片・逸文等をもとに復元された『十門和諍論』・『般若心經疏』(本書を数えれば、現存する著述は二十三部となる)、經論章疏とは性格を異にする『大乘六情懺悔』・『證性歌・無碍歌』は、引用・類似文例の調査及び著述の成立年次の検討の対象外とする。

⁽³⁾ 科段分けは(李箕永 [1983] p.62)を、概要は(橘川智昭 [2003] pp.547-549)を参照した。

元曉『法華宗要』訳注 (2)

2-2-2. 一乗教	⇒ 一切言教～莫不令至一切智地 → 一言一句皆為仏乗一相一味	『妙法華』「方便品」
2-2-3. 一乗因		
2-2-3-1. 性因	⇒ 一切衆生所有仏性～為三身果而作因故 → 趣寂二乗・無性有情～皆有仏性～悉當作仏	『法華論』所訳の『法華經』「常不輕菩薩品」、『法華論』、『法華論』
2-2-3-2. 作因	⇒ 一切善根～莫不同至無上菩提 → 一切皆是一乗～皆依仏性無異体故 → 一切衆生～一切善根～皆出仏性同歸本原	『妙法華』「方便品」、『菩薩瓔珞本業經』、『大悲經』、『大薩遮尼乾子所説經』「一乗品」、『法華論』、『法華論』
2-2-4. 一乗果		
2-2-4-1. 本有果	⇒ 法仏菩提 → 就一法界顕一果体 → 明法仏菩提果体	『妙法華』「如來壽量品」、『菩薩瓔珞本業經』、『菩薩瓔珞本業經』
2-2-4-2. 始起果	⇒ 報仏菩提・応化[仏]菩提	『法華論』、『法華論』所訳の『法華經』「如來壽量品」、『法華論』、『法華論』所訳の『法華經』「如來壽量品」、『妙法華』「見寶塔品」
2-2-4. 一乗果	⇒ 一切衆生皆修万行同得如是三[＝法仏・報仏・応化[仏]]菩提果 → 明如來所願満足 → 遍化三世一切衆生～如応皆令得仏道 → 諸仏初成正覺～一念之頃遍化三世一切衆生～無一不成無上菩提 → 願与菩提不滿等～則已満則等満	『妙法華』「方便品」、『寶雲經』、『大方等無想經』、『大方廣佛華嚴經』、『妙法華』「如來壽量品」、『法華論』、『大方廣佛華嚴經』
2-2-5. 一乘法	⇒ 理・教・因・果 → 如是四法更互相應共運一人到薩婆若	
2-2-6. 問答 I	⇒ 果既到究竟之处云何与三[＝理・教・因]共運衆生 → 此有四義 → 一、由未来世有仏果力～如是展転令至仏地 → 二、当果報仏現諸応化～化今衆生令得増進 → 三、六处授記～当果属彼地得運故 → 四、此經中説一切種智～故説衆生乗於果乗～果乗能運因地衆生 → 究竟一乗真實相	『大般涅槃經』、『菩薩瓔珞本業經』、『妙法華』「譬喻品」、『妙法華』「譬喻品」

§ 2. 「第二弁經宗」訳注

【凡例】

1. [原文] は、「仁和寺蔵本」を使用した。また、[原文] の見出しに付した頁数は、「仁和寺蔵本」・『大正蔵』・『韓佛全』の該当箇所を示す。
2. [原文]・[訓読文] の字体は、「原本」を充実に再現するために、略字・俗字・異体字を含めて可能な限りそのままの形で表記した。例、「總→總」「體→軀」「與→与」
3. [原文] の句読点は、筆者の任意による。また、[原文] の下線は、經典・論書からの引用・類似箇所を示す。
4. [訓読文] の難読語に付したルビ、理解のために付した中黒点は、筆者の任意による。
5. [原文]・[訓読文] の註は、該当語の最初に付した。また、使用した符号は以下のとおりである。→『』經典・論書名、「」經典の品名、() 小字双行、{ } 写經者による添字、[]・…… 筆者による補足、ゝ「原本」のおどり字 (すべて補って記した)、□ 欠字の確定・誤字の訂正・脱字の補填 (經典・論書からの引用文中、字の相違箇所は太字で示し、また、明らかに誤字・脱字と思われるものは訂正・補填した) 箇所を示す。

2. 第二弁經宗、2-1. 能乗一仏乘人(1)

[原文] (NNJ. p.6, //25-30・T.34 p.871a, //8-14・HBZ.1 p.488a, //17-24)

第二弁經宗者。此經正以廣大甚深一乘實相為所詮宗。總說雖然。於中分別者。一乘實相。⁽⁴⁾略說有二。謂能乘人及所乘法。此經所說一乘人者。三乘行人。四種聲聞。三界所有四生衆生。並是能乘一佛乘人。皆為佛子。悉是菩薩。以⁽⁵⁾皆有佛性當紹佛位故。乃至

⁽⁴⁾ 表貝(CE.-751-)集『華嚴經文義要決問答』卷第三(二科入)に「元曉師云。所言乘者。略說有二。謂能乘人及所乘法。謂三乘行人。四種聲聞。乃至元性有情。並是能乘人。以皆有佛性故。教理因果。是所乘法。」(SZ.8 no.237 p.436a, //17-19) とある。また、義寂(CE.-702-)釈義一撰『法華經論述記』にも「自在功德義成就者。謂法師功德。前是所乘法。此是能乘人。如自所證。說授與人。不待思惟。成所作事。故云自在功德成就。」(SZ.46 no.790 p.781a, //17-19) と類似する文例が見られる。

⁽⁵⁾ [如來藏・仏性④] 勒那摩提(CE.-508-)共僧朗等訳『妙法蓮華經論優波提舍』(以下、『法華論』)に「●菩薩授記者。●如不輕菩薩●品示現。●禮拜讚歎●言。我不輕汝。汝等皆●當作佛者。●示諸衆生皆有佛性故。」【T.26 p.18 脚註③】「(與授記)+菩◎◎」【T.26 p.18 脚註④】「如+(下文)◎◎」【T.26 p.18 脚註⑤】「品+(中)◎◎」【T.26 p.18 脚註⑥】「(應知)+禮◎◎」【T.26 p.18 脚註⑦】「(作如是)+言◎◎」【T.26 p.18 脚註⑧】「當+(得)◎◎」【T.26 p.18 脚註⑨】「示+(現)◎◎」(T.26 no.1520 p.18b, //6-8)とあり、また、これに反論するかのよう、親光菩薩(CE.VI-VII)等造玄奘(CE.624-664)訳(CE.649)『佛地經論』卷第二に「雖餘經中宣說一切有情之類皆有佛性皆當作佛。然就真如法身佛性。或就少分一切有情方便而說。為令不定種●性

⁽⁶⁾无性有情亦皆當作佛故。

〔訓読文〕

第二に⁽⁷⁾經宗を弁ずるとは、此の『[妙法蓮華]經』は、正しく廣大甚深なる一乘の實相を以て、⁽⁸⁾所詮の宗と為す。總說せば、然りと雖も、中に於いて分別せば、一乘の實相、略說するに二有り。謂わく、能乗の人及び所乗の法なり。此の『[妙法蓮華]經』の所說の一乗の人とは、三乗の行人も、⁽⁹⁾四種の聲聞も、三界所有の⁽¹⁰⁾四生の衆生も、並びに是れ能乗の一佛乗の人にして、皆な佛子と為す。悉く是れ菩薩なり。皆な佛性有るを以て、當に佛位を紹ぐべきが故に。乃至、⁽¹¹⁾无性有情も亦た皆な當に作佛すべきが故に。

有情。決定速趣無上正等菩提果故。」【T.26 p.298 脚註①】「性=姓㊦㊧㊨*」(T.26 no.1530 p.298a, Ⅱ.24-28)と、卷第三に「說如是言。一切有情是如來藏。一切有情皆有佛性。爲引不定種[●]性有情。令心決定趣大乘故。就有如來種[●]性有情。說如是言。一切有情皆當作佛。如有說言。一切無常一切皆苦。如是皆說少分一切非全一切若不爾者。便違所說。五種種[●]性諸佛功德。應當有盡。無所度故。」【T.26 p.304 脚註①】「性=姓㊦*」(T.26 no.1530 p.305c, Ⅱ.7-13)とあるが、これらの文句に依拠した表現と考えられる。とくに元曉は、以下において『佛地經論』の非なることを論証していくために、あえてこの文句を取り入れたのかも知れない。

- ⁽⁶⁾ 元曉(CE.617-686)述(CE.671)『判比量論』にも「十三或有爲難五種之[●]性、立比量言、无性有情必當作佛。以有心故。」【SZ.53 p.952 脚註④】「種ト讀ム㊦」(SZ.53 no.860 p.952c, Ⅱ.3-4)と同文例が見られる。
- ⁽⁷⁾ 【經宗】經の根本趣旨のこと。
- ⁽⁸⁾ 【所詮】經文等に依って顯わされる義理。
- ⁽⁹⁾ 四種聲聞については、『法華論』に「聲聞有四種。一者決定聲聞。二者增上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。」(T.26 no.1519 p.9a, Ⅱ.15-17)とあるほか諸說あるが、簡潔には、圓測(CE.613-696)撰『解深密經疏』卷第四に「如瑜伽八十。彼云。云何名爲四種聲聞。一者變化聲聞。法華論應化。寶積論應聲聞 二者增上慢聲聞。寶積論云我慢聲聞 三者迴向菩提聲聞。法華退菩提。寶積作菩提 四者一向趣寂聲聞。法華決定聲聞寶積寂滅性。」(SZ.21 no.369 p.274a, Ⅱ.12-15)とある。
- ⁽¹⁰⁾ 鳩摩羅什(CE.343-409?)訳(CE.406)『妙法蓮華經』隨喜功德品に「若四百萬億阿僧祇世界六趣四生衆生卵生胎生濕生化生。若有形無形。有想無想。非有想非無想。無足二足四足多足。如是等在衆生數者。」(T.9 no.262 p.46c, Ⅱ.6-9)と、また、曼陀羅仙(CE.-503-)訳『寶雲經』卷第二に「云何名菩薩出過一切衆生發願。菩薩願使一切四生衆生悉成菩提[●]如般涅槃。而我或入涅槃。或不入涅槃。是名菩薩出過一切衆生發願。」【T.16 p.218 脚註⑤】「如=而㊦㊧」(T.16 no.658 p.218b, Ⅱ.1-4)とあり、これらの文句に依拠した表現と考えられる。
- ⁽¹¹⁾ 【無性有情】五種姓中無性有情。また無性種姓。ただ人天有漏の種子のみを具し、三乘無漏の種子を有せず、畢竟成仏すること能わざる有情をいう。無性有情の語は、護法(CE.530-561)等菩薩造玄奘訳(CE.659)『成唯識論』卷第三に「阿陀那識甚深細 一切種子如瀑流 我於凡愚不開演 恐彼分別執爲我 以能執持諸法種子。及能執受色根依處。亦能執取結生相續。故說此識名阿陀那。無[●]性有情不能窮底故說甚深。趣寂種性不能通達故名甚細。是一切法眞實種子。緣擊便生轉識波浪恒無間斷猶如瀑流。凡即無[●]性。愚即趣寂。恐彼於此起分別執墮諸惡趣障生聖道。故我世尊不爲開演。」【T.31 p.14 脚註④】「性=姓㊦*」(T.31 no.1585 p.14c, Ⅱ.5-13)とはじめて見える。とくに、この用例によって、元曉は『法華宗要』の著述の段階で、すでに『成唯識論』・五性格別説を知っており、これに対して、『法華宗要』のなかで、無性有情の作仏を認め、これを主張せんとしたことが窺われる。

2-1. 能乗一仏乗人 (2)

〔原文〕 (NNJ. pp.6-7, Ⅱ.30-40・T.34 p.871a, Ⅱ.14-25・HBZ.1 p.488a, Ⅱ.24 - p.488b, Ⅱ.12)

如寶雲經言。⁽¹²⁾菩薩發心便作是念。一切世界中少智衆生。愚癡瘡癰无涅槃分。不生信心者。⁽¹³⁾為一切菩薩之所棄捨。如是衆生我皆調伏。乃至坐於道場得阿耨菩提。發此心時。魔宮震動。又言。⁽¹⁴⁾菩薩成佛衆願滿足。方便品說。⁽¹⁵⁾三世諸佛但教化菩薩。譬喻品云。⁽¹⁶⁾一切衆生。皆是吾子。故又言。⁽¹⁷⁾諸法從本來。常自寂滅相。佛子⁽¹⁸⁾行道已。來世得作佛。斯則无一衆生而非佛子。所以廣大。此衆生界即涅槃界。是故甚深。如論說言。⁽¹⁹⁾三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。是謂能乗一佛乘人也。

〔訓読文〕

『寶雲經』に言うが如し、「菩薩、發心して便ち是の念を作さく、「一切世界の中の少智の衆生は、愚癡・瘡癰おんなにして、涅槃の分無し。信心を生ぜざる者は、一切菩薩の棄捨する所と為る。是くの如き衆生をも、我れ[=智慧具足の菩薩]は皆な調伏し、乃至、道場に坐し、阿耨菩提を得せしめん」と。此の心を發する時に、魔宮も震動す」と。又た『寶雲經』に] 言わく、「菩薩成佛せば、衆願満足す」と。『妙法蓮華經』「方便品」には、「三世の諸佛は、但だ菩薩のみを教化したもう」と説く。『妙法蓮華經』「譬喻品」に云わく、「一切衆生は、皆な是れ吾が子なり」と。故に又た『妙法蓮華經』「方便品」に] 言わく、「諸法は本もと從り來、常このかたに自ずから寂滅おのの相なればなり。佛子は道どうを

- (12) 『寶雲經』卷第二に「當行慈悲智慧具足。菩薩發心便作是念。一切世界中少智衆生。愚癡瘡癰无涅槃分不生信心者。而為一切諸佛菩薩之所棄捨。如此衆生我皆調伏。乃至坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。發此心時。一切魔宮悉皆震動。」(T.16 no.658 p.218c, Ⅱ.5-10) とある。
- (13) 『大正藏』の欠字(11・12/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、二字乃至三字が入るほどのスペースがある。『寶雲經』の該当箇所には「而為一切諸佛」とあるが、「仁和寺藏本」に残っている字形から「為一切」と読めるため、「為一切」に確定して採用する。
- (14) 『寶雲經』卷第二に「譬如油鉢若已平滿。更投一[●]滴終不復受。菩薩成佛衆願滿足亦復如是。更無減少一塵之願。」【T.16 p.218 脚註⑩】「滴=滴[㊦]」(T.16 no.658 p.218c, Ⅱ.13-16) とある。
- (15) 『妙法蓮華經』方便品に「佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作常為一事。唯以佛之知見示悟衆生。舍利弗。如來但以一佛乘故為衆生說法。無有餘乘若二若三。舍利弗。一切十方諸佛法亦如是。」(T.9 no.262 p.7a, Ⅱ.29 - p.7b, Ⅱ.4) とある。
- (16) 『妙法蓮華經』譬喻品に「一切衆生 皆是吾子」(T.9 no.262 p.14c, Ⅱ.20-21) とある。
- (17) 『妙法蓮華經』方便品に「諸法從本來 常自寂滅相 佛子行道已 來世得作佛」(T.9 no.262 p.8b, Ⅱ.25-26) とある。
- (18) 『大正藏』の欠字(13/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、『妙法蓮華經』方便品の該当箇所「行」とあり、「仁和寺藏本」に残っている字形からも「行」と読めるため、「行」に確定して採用する。
- (19) [如來藏・仏性⑥]『法華論』に「三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。」(T.26 no.1520 p.18c, Ⅱ.11-12) とある。

行^{ゆえ}じ已りて、來世に作佛することを得ん」と。斯れ則ち一衆生も佛子に非ざること無し。所以に廣大なり。此の衆生界は即ち涅槃界なり。是の故に甚深なり。『[法華]論』に説いて言うが如し、「三界の相」とは、衆生界は即ち涅槃界なるを謂う。衆生界を離れずして如來藏有るが故なり」と。是れを能乗の一佛乗の人と謂うなり。

2-2. 一乗人所乗之法、2-2-1. 一乘理 (1)

〔原文〕(NNJ. pp.7-8, Ⅱ.40-47・T.34 p.871a, Ⅱ.25 - p.871b, Ⅱ.4・HBZ.1 p.488b, Ⅱ.13-22)

此一乘人⁽²⁰⁾所乗之法。略而説之有四種一。謂一乘理。及一乘教。一乘之因。一乘之果。一乘理者。謂一法界。亦名法身名如來藏。如薩遮尼捷子經云。⁽²¹⁾文殊師利白佛言。若无三乘差別性者。何故如來說三乘法。佛言。諸佛如來說三乘者。示地差別。非乘差別。説人差別。非乘差別。諸佛如來說三乘者。示⁽²²⁾小功德知多功德。而佛法中无乘差別。何以故。以法界⁽²³⁾法无差別故。

〔訓読文〕

此の一乗の人の所乗の法は、略して之れを説くに四種の一有り。謂わく、一乗の理及び一乗の教、一乗の因、一乗の果なり。一乗の理とは、一法界を謂う。亦た法身と名づけ、如來藏と名づく。『[大]薩遮尼捷子[所説]經』に云うが如し、「文殊師利、佛に白して言さく、「若し三乗の差別の性无くんば、何故に如來は三乗の法を説くや」と。佛の言わく、「諸佛如來の三乗を説くは、地の差別を示し、乗の差別[を示す]に非ず。人の差別を説き、乗の差別[を説く]に非ず。諸佛如來の三乗を説くは、小功德を示し、多功德を

(20) ①壽靈(CE.-757-791-)述『華嚴五教章指事』上巻本に「故元曉[●]師云。所乗之法。略而説之。有其四種。一謂一乘理及一乘教一乘之因。一[●]乘果。」(T.72 p.205 脚註⑦)「[師]-⑧」(T.72 p.205 脚註⑧)「乗+(之)⑨」(T.72 no.2337 p.205b, Ⅱ.27-29)と、②増春(CE.-947-956-)釈『華嚴一乘義私記』に「指事中引元曉師釋云。所乘法略有四種。一謂一乘理一乘教一乘因一乘果。」(T.72 no.2327 p.44b, Ⅱ.15-17)と、③凝然(CE.1240-1321)述『五教章通路記』卷第三に「答指事云。元曉云。所乗之法。略而説之。有其四種。一謂一乘理。及一乘教。一乘之因。一乘之果。」(T.72 no.2339 p.316a, Ⅱ.21-23)と、④普寂(CE.1707-1781)撰『華嚴五教章衍秘鈔』卷第二に「指事云。元曉云。所乗之法。略説有四。謂一乘之教理行果。」(T.73 no.2345 p.640c, Ⅱ.24-25)とある。②③④は、①からの孫引き。

(21) 菩提留支(CE.-508-)訳『大薩遮尼乾子所説經』卷第二に「爾時聖者文殊師利法王子菩薩白佛言。世尊。若无三乘差別性者。何故如來爲諸衆生説三乘法。而言此是聲聞學乘。而言此是緣覺學乘。而言此是菩薩學乘。佛告文殊師利。諸佛如來說三乘者。示地差別。非乘差別。諸佛如來說三乘者。説法相差別。非乘差別。諸佛如來說三乘者。説人差別。非乘差別。諸佛如來說三乘者。示少功德知多功德。而佛法中无乘差別。何以故。以法界性无差別故。」(T.9 no. 272 p.325c, Ⅱ.25 - p.326a, Ⅱ.4)とある。また、智周(CE.668-723)撰『法華玄贊攝釋』卷第三(SZ.34 no.636 p.68b, Ⅱ.12-21)にも本箇所引用が見られる。

(22) 「仁和寺蔵本」には「小」とあるが、『大薩遮尼乾子所説經』には「少」とある。

(23) 「仁和寺蔵本」には「法」とあるが、『大薩遮尼乾子所説經』には「性」とある。

知ら[しむ]。而して佛法の中に乗の差別無し。何を以ての故に。法界の法に差別无きを以ての故なり」と。

2-2-1. 一乗理 (2)

〔原文〕(NNJ. pp.8-9, Ⅱ.47-55・T.34 p.871b, Ⅱ.4-13・HBZ.1 p.488b, Ⅱ.22 - p.488c, Ⅱ.8)

金光明經言。⁽²⁴⁾法界无分別。是故无異乘。為度衆生故。分別說三乘。又此經言。⁽²⁵⁾諸佛如來能知彼法究竟實相。論釋此云。⁽²⁶⁾實相者。謂如來藏法身之體不變⁽²⁷⁾相故。又下文言。⁽²⁸⁾同者。示諸佛如來法身之性同。諸凡夫聲聞辟支佛等。法身平等无有差別故。案云。如來法身如來藏性。一切衆生平等所有。能運一切同歸本原。由是道理无有異乘。故說此法為一乘性。如是名為一乘理也。

〔訓読文〕

『[合部]金光明經』に言わく、「法界は無分別なり、是の故に乘に異なり無し、衆生を度せんが為めの故に、分別して三乗を説く」と。又た此の『[法華論]』の引く『法華經』に言わく、「諸佛如來は、能く彼の法を知り、實相を究竟したもう」と。『[法華論]』にこれを釋して云わく、「實相とは、謂わく如來藏なり。法身の體は、不變の相なるが故なり」と。又た下の『[法華論]』の文に言わく、「[聲聞]も同じなりとは、諸佛如來の法身の性は、^{もろもろ}諸の凡夫・聲聞・辟支佛等に同じきを示す。法身平等にして差別有ること无きが故なり」と。案じて云わく、如來の法身・如來藏の性は、一切衆生の平等の

(24) 寶貴合(CE.597)『合部金光明經』卷第三に「法界無分別 是故無異乘 為度衆生故 分別說三乘。」(T.16 no.664 p.376c, Ⅱ.14-15)とある。

(25) 『法華論』に「諸佛如來能知彼法究竟實相。」(T.26 no.1520 p.14b, Ⅱ.8-9)とある。ここは、『妙法蓮華經』方便品の「乃能究盡諸法實相。」(T.9 no.262 p.5c, Ⅱ.11)に対応する箇所であるが、元曉は『妙法蓮華經』ではなく、『法華論』所訳の『法華經』の經文を引用している。なお、元曉述『金剛三昧經論』卷上にも「法華論云。諸佛如來能知彼法究竟實相。言實相者。謂如來藏法身之體不變義故。」(T.34 no.1730 p.964b, Ⅱ.26-28)と同文例が見られる。

(26) 「[如來藏・仏性①]」『法華論』に「實相者。謂如來藏法身之體不變[●]故。」【T.26 p.15b 脚註⑤】「(義)+故㊦㊧」(T.26 no.1520 p.15b, Ⅱ.18-19)とある。

(27) 「仁和寺藏本」には「相」とあるが、『法華論』の二訳のうち、勒那摩提共僧朗等訳の一巻本『法華論』(以下、勒那摩提訳本)にはなく、菩提留支共沙門曇林等訳(CE.528)の二巻本『法華論』(以下、菩提留支訳本)には「義」(T.26 no.1519 p.6a, Ⅱ.13)とある。このように、元曉の著述における『法華論』の引用文例のなかから、二訳の相違箇所を分析することによって、元曉は『法華宗要』の著述の段階では、勒那摩提訳本を用い、また、『金剛三昧經論』の著述の段階では、菩提留支訳本を参照したことが判然となる。ちなみに、『法華論』の書名を挙げて引用している『涅槃宗要』の場合は、『金剛三昧經論』と同じく菩提留支訳本に類似している。

(28) 『法華論』に「聲聞同者。●示諸佛如來法身之性同。諸凡夫聲聞辟支佛等。法身平等無差別故。」【T.26 p.16 脚註⑥】「示=此中示現㊦㊧」(T.26 no.1520 p.16c, Ⅱ.13-15)とある。

所有にして、能く一切を運んで同じく⁽²⁹⁾本原に歸す。是の⁽³⁰⁾道理に由りて、乗を異にすること有ること無し。故に此の法を説いて一乗の性と為す。是くの如きを、名づけて一乗の理と為すなり。

2-2-2. 一乗教

〔原文〕(NNJ. pp.9-10, Ⅱ.55-62・T.34 p.871b, Ⅱ.13-21・HBZ.1 p.488c, Ⅱ.8-17)

一乗教者。十方三世一切諸佛。從初成道乃至涅槃。其間所說一切言教。莫不令至一切智地。是故皆名為一乗教。如方便品{言}。⁽³¹⁾是諸佛亦以無量無數方便。種種因緣。譬喻言辭。而為衆生演說諸法。是法皆為一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得一切種智。故是教遍通十方三世。無量無邊。所以廣大。故一言一句。皆為佛乘。一相一味。是故甚深。如是名為一乗教也。

〔訓読文〕

一乗の教とは、十方三世の一切諸佛、初めて成道したもう従り、乃ち涅槃に至るまで、其の間、所説の一切の言教は、⁽³²⁾一切智地に至らしめざること莫し。是の故に皆な名づけて一乗の教と為す。『妙法蓮華經』「方便品」に{言}うが如し、「是の諸佛も亦た無量無數の方便と種種の因緣と譬喻と言辭とを以て、衆生の為めに諸法を演説したもう。是の法も皆な一佛乗の為めの故なり。是の諸^{いろもろ}の衆生も、佛に従いたてまつりて、法を聞かば、究竟して皆な一切種智を得るなり」と。故に是の教は遍く十方三世の無量無邊に通ず。所以に廣大なり。故に一言一句も、皆な佛乗にして、⁽³³⁾一相一味と為す。是の故に甚深なり。是くの如きを、名づけて一乗の教と為すなり。

2-2-3. 一乗因、2-2-3-1. 性因

〔原文〕(NNJ. pp.10-11, Ⅱ.62-69・T.34 p.871b, Ⅱ.21-29・HBZ.1 p.488c, Ⅱ.17 - p.489a, Ⅱ.8)

⁽²⁹⁾ 【本原】本原に同じ。われわれの存在のもと。自性清浄心をいう。

⁽³⁰⁾ 【道理】「彼は本書 [= 『涅槃宗要』] の中で随處で「道理」という言葉を用いている。元曉の和諍思想を可能ならしめる「道理」とは一体何か。それは万流が一味海に合するよう、佛教の衆典の部分は統合することができるのであり、固執を離れ佛意の至公を開けば百家の異淨をそのまま調和させることが出来るのである。これが元曉の意見である。」(木村宣彰 [1977] p.57) 参照。引用文中、[...] 括弧内は筆者による。以下同様。

⁽³¹⁾ 『妙法蓮華經』方便品に「舍利弗。現在十方無量百千萬億佛土中。諸佛世尊多所饒益安樂衆生。是諸佛亦以無量無數方便。種種因緣。譬喻言辭。而為衆生演說諸法。是法皆為一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得一切種智。」(T.9 no.262 p.7b, Ⅱ.11-16) とある。

⁽³²⁾ 【一切智地】一切智を証得する位。即ち仏果の位。『妙法蓮華經』での用例は、藥草喻品に一箇所あるのみ。

⁽³³⁾ 【一相一味】仏諸説の法は、衆生の機根に随って、二乗・三乗・五乗と分かれるも、実は実相一味の法なりという意。『妙法蓮華經』での用例は、藥草喻品に二箇所見える。

一乗因者。總説有二。一者性因。二者作因。言性因者。一切衆生所有佛性。為三身果而作因故。如常不輕菩薩品云。⁽³⁴⁾我不輕汝。汝等。皆當作佛。論釋此言。⁽³⁵⁾示諸衆生皆有佛性故。又言。⁽³⁶⁾決定増上慢二種聲聞根未熟故。佛不與授記。菩薩與授記。菩薩與授記者。方便令發心故。當知依此經意。而説趣寂二乗。无性有情。皆有佛性。悉當作佛。

〔訓読文〕

一乗の因とは、總説するに二有り。一には、性因なり。二には、作因なり。⁽³⁷⁾性因と言うは、一切衆生所有の佛性なり。三身の果の爲めに因と作るが故に。『法華論』の引く『法華經』の「常不輕菩薩品」に云うが如し、「我れ汝を輕しめず、汝等、皆な當に作佛すべければなり」と。『法華論』にこれを釋して言わく、「諸の衆生に皆な佛性有ることを示すが故なり」と。又た『法華論』に言わく、「決定〔聲聞と〕・増上慢〔聲聞と〕の二種の聲聞は根未熟なるが故に、佛、授記を与えず、菩薩が授記を与う。菩薩が授記を与うとは、方便もて發心せしむるが故なり」と。當に知るべし。此の經意に依りて、⁽³⁸⁾趣寂二乗・无性有情も、皆な佛性有りて、悉く當に作佛すべしと説く。

(34) 『妙法蓮華經』常不輕菩薩品に「我不輕汝 汝等行道 皆當作佛」(T.9 no.262 p.51b, l.16) とある。元曉は『妙法蓮華經』ではなく、『法華論』所訳の『法華經』の經文を引用している。

(35) 〔如来藏・仏性④〕『法華論』に「[●]菩薩授記者。[●]如不輕菩薩[●]品示現。[●]禮拜讚歎[●]言。我不輕汝。汝等皆[●]當作佛者。[●]示諸衆生皆有佛性故。」【T.26 p.18 脚註③】「(與授記)+菩[●]【T.26 p.18 脚註④】「如+(下文)○[●]【T.26 p.18 脚註⑤】「品+(中)○[●]【T.26 p.18 脚註⑥】「(應知)+禮○[●]【T.26 p.18 脚註⑦】「(作如是)+言○[●]【T.26 p.18 脚註⑧】「當+(得)○[●]【T.26 p.18 脚註⑨】「示+(現)○[●]」(T.26 no.1520 p.18b, ll.6-8) とある。

(36) 『法華論』に「[●]決定増上[●]慢二種聲聞根未熟故。如来不與授記。[●]菩薩與授記。菩薩[●]授記者。方便令發[●]心故。」【T.26 p.18 脚註⑩】「決定=若決定者○[●]【T.26 p.18 脚註⑪】「慢+(者)○[●]【T.26 p.18 脚註⑫】「(應化聲聞是大)+菩薩○[●]【T.26 p.18 脚註⑬】「(與)+授○[●]【T.26 p.18 脚註⑭】「(菩提)+心○[●]」(T.26 no.1520 p.18b, ll.12-14) とある。

(37) 【性因】天台教学でいう三因(=正・了・縁)仏性のうち、正因仏性に同じ。真如実相の理をいう。智顗(CE.538-597)説灌頂(CE.561-632)述『妙法蓮華經玄義』卷第十上に「又云。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。即正因佛性。又云。爲令衆生開佛知見。即了因佛性。又云。佛種從縁起。即縁因佛性。」(T.33 no.1716 p.803a, ll.7-10) とある。

(38) 【趣寂二乗】趣寂種姓。また定性二乗。自己の苦しみを滅して寂靜にのみおもむこうとする独覺姓と声聞姓とをまとめていう。独覺姓・声聞姓としてその種姓がはっきり定まり、最終的には無余依般涅槃に入ってしまう人をいう。趣寂二乗の語は、基(CE.632-682)撰『成唯識論述記』卷第六本に「論。二乗究竟道至樂利樂他故。述曰。二乗無學。廻心欣大菩提故。佛究竟果。樂盡未來際利樂有情故。皆得名不捨善軛。趣寂二乗亦利樂他。即波羅蜜者。略故不説。」(T.43 no.1830 p.438a, ll.6-9) とはじめて見える。本書の成立については、(保坂玉泉[1940] p.15)に「瑜伽唯識系統の中で最初に造られたものは『述記』と『樞要』であることは云ふ迄も無い。『成唯識論』の譯出は顯慶四年(西紀六五九)慈恩二十八歳の時であるが、奘師と共に翻譯しつゝ講を受け、講に随つて疏を製したのであるから、此二疏は『唯識論』の譯出と前後して出来たもの、論疏中最も早いものなること明かである。」と、(林香奈[2007] p.216 註3)に「基が『成唯識論』の翻譯作業に加わりながら、

2-2-3-2. 作因 (1)

〔原文〕(NNJ. pp.11-12, Ⅱ.69-74・T.34 p.871b, Ⅰ.29 - p.871c, Ⅰ.5・HBZ.1 p.489a, Ⅱ.9-15)

言作因者。若聖若凡。内道外道。道分福分。一切善根。莫不同至无上菩提。如下文言。

⁽³⁹⁾或有人礼拜。或復但合掌。乃至舉一手。或復⁽⁴⁰⁾小⁽⁴¹⁾低頭。⁽⁴²⁾若人散乱心。入於塔廟中。一稱⁽⁴³⁾南無佛。皆已成佛道。乃至廣說。本⁽⁴⁴⁾業經言。⁽⁴⁵⁾凡聖一切善。不受有漏果。唯受常⁽⁴⁶⁾住之果。

玄奘の教えを受けて執筆したものと思われることから、その原型は『成唯識論』が完成した六五九年頃にはすでに存在しており、基の著述活動の中でも比較的初期にまとめられたものであると推定される。」とある。引用文中、下線は筆者による。以下同様。

- (39) 『妙法蓮華經』方便品に「[●]或有人禮拜 或復但合掌 乃至舉一手 或復小低頭」【T.9 p.9 脚註[●]】「或 = 若[●]」(T.9 no.262 p.9a, Ⅱ.19-20)とある。また、『法華論』には「謂發菩提心行菩薩行者。所作善根能證菩提。非諸凡夫及決定聲聞未發菩提心者之所能得故。如是乃至小低頭[●]等。亦如是。」【T.26 p.17 脚註[●]】「等 + (皆) ⊙[●]」(T.26 no.1520 p.17b, Ⅱ.2-4)とある。なお、元曉撰『涅槃宗要』にも「第二句者勸請意說。既除夢惡勸修衆善。舉手低頭皆成佛道故。既除絕望心。識離諸惡。惡爲禍本能障佛道故。」(T.38 no.1769 p.252a, Ⅱ.21-23)と同文例が見られる。
- (40) 「仁和寺藏本」の誤字か。「仁和寺藏本」には「少」とあるが、『妙法蓮華經』方便品の該当箇所「小」とあるため、「小」に訂正して採用する。ただし、諸經論に「少低頭」とする用例はあるため、元曉自らが「少」に訂正した可能性もある。
- (41) 『大正藏』の誤字。「仁和寺藏本」は破損しているが、『大正藏』には「傾」とある。『妙法蓮華經』方便品の該当箇所「低」とあり、「仁和寺藏本」に残っている字形からも「低」と読めるため、「低」に訂正して採用する。
- (42) 『妙法蓮華經』方便品に「若人散亂心 入於塔廟中 一稱南無佛 皆已成佛道」(T.9 no.262 p.9a, Ⅱ.24-25)とある。なお、元曉撰『大慧度經宗要』にも「問是二師說何者爲實。答二種教門三種法輪是就一途亦有道理。然其判此大品經等皆屬第二時攝。第二法輪者理必不然。違經論故。如此論釋畢定品言。須菩提聞法華經說若於佛所作小功德。乃至戲笑一稱南無佛。漸漸必當作佛。」(T.33 no.1697 p.73b, Ⅱ.11-17)と同文例が見られる。
- (43) 『大正藏』の欠字(14/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、『妙法蓮華經』方便品の該当箇所「南」とあり、「仁和寺藏本」に残っている字形からも「南」と読めるため、「南」に確定して採用する。
- (44) 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「乘」とあるが、「仁和寺藏本」に「業」とあるため、「業」に訂正して採用する。ちなみに、写本での「乘」・「業」の誤写・誤読はよくある間違いである。『法華宗要』のほかに、「本業經」を「本乘經」とする用例は、『法華宗要』と同じく「仁和寺藏古寫本」がその底本になっている、聖詮(CE.-1199-)撰『華嚴五教章深意鈔』卷第三(T.73 no.2341 p.19a, Ⅱ.8-9)に一例見られる。
- (45) 竺佛念訳(CE.376-378)『菩薩瓔珞本業經』卷下に「一切善受佛果。無明受有爲生滅之果。是故善果從善因生。是故惡果從惡因生。故名善不受生滅之果。唯受常佛之果。佛子。若凡夫聖人一切善。皆名無漏不受漏果。」(T.24 no.1485 p.1019a, Ⅱ.7-11)とあり、ここを簡略して引用している。なお、元曉撰『本業經疏』卷下にも「唯受常佛之果者。善是隨順寂靜性故。重釋中言凡聖一切善皆名無漏者。是釋唯受常果之由。由其隨順寂靜之性。違逆諸漏。故名無漏」(SZ.39 no.705 p.250b, Ⅱ.22-24)と同文例が見られる。
- (46) 「仁和寺藏本」には「住」とあるが、『菩薩瓔珞本業經』・『本業經疏』には「佛」とある。

〔訓読文〕

作因と言うは、若しは聖、若しは凡、内道、外道、⁽⁴⁷⁾道分、福分の一切の善根は、同じく无上菩提に至らざること莫し。下の『妙法蓮華經』「方便品」の〕文に言うが如し、「或は人有りて禮拜し、或は復た但だ合掌のみし、乃至、一手を挙げ、或は復た^小しく頭を^低れて〔〕……〔〕若し、人、散乱の心にて、⁽⁴⁸⁾塔廟^{とうみょう}の中に入りて、一たび南无佛と稱せし、皆な已に佛道を成じき」と。乃至、廣說せば、『菩薩瓔珞本業經』に言わく、「凡〔夫と〕聖〔人と〕の一切の善は、有漏果を受けず、唯だ常住の果を受く」と。

2-2-3-2. 作因 (2)

〔原文〕 (NNJ. pp.12-13, Ⅱ.74-82・T.34 p.871c, Ⅱ.5-13・HBZ.1 p.489a, Ⅱ.15-24)

大悲經言。⁽⁴⁹⁾佛告阿難。若人樂⁽⁵⁰⁾著三有果報。於佛福田。若行布施諸餘善根。願我世世

⁽⁴⁷⁾ 【道分】出世の果を感じしめる發菩提心の行をいう。福分が世俗的であるのに対して、これは出世間的である。なお、元曉撰『起信論疏』卷下には「有熏習以下。次答第二問。明不定人所修之行。言有熏習善根力者。依如來藏內熏習力。復依前世修善根力。故今得修信心等行也。言信業果報能起十善者。起福分善也。厭生死苦求無上道者。發道分心也。得值諸佛修行信心者。正明所修道分善根。所謂修行十種信心。其相具如一道章說也。」(T.44 no.1844 p.219c, Ⅱ.20-27) とある。

⁽⁴⁸⁾ 【塔廟】仏舍利を安置して供養するための建造物。

⁽⁴⁹⁾ 那連提耶舍(CE.490-589)訳『大悲經』卷第三に「①佛言。如是如是。阿難。若有衆生樂著生死三有愛果。於佛福田種善根者作如是言。以此善根願我莫般涅槃。阿難。是人若不涅槃。無有是處。阿難。③是人雖不樂求涅槃。然於佛所種諸善根。我說是人必得涅槃盡涅槃際。乃至佛所得一發心。」(T.12 no.380 p.960a, Ⅱ.7-12) と、また、「阿難。②若有衆生貪世間報。行世間行愛樂世間憍求世間。於諸佛所修行布施。以此善根回向憍求人天善道。復有衆生於諸佛所種諸善根。作如是言。以此善根願我世世莫入涅槃。阿難。是等衆生以此善根不入涅槃。無有是處。何以故。阿難如是諸佛無上福田。無諸荒穢亦無棘刺。離欲垢過極甚清淨。」(T.12 no.380 p.959c, Ⅱ.18-23) とあり、まとまった一箇所からの引用ではなく、三箇所(=①～③)を適宜に再編して引用している。なお、元曉撰『本業經疏』卷下にも「如大悲經言。①佛言阿難。若人樂著三有果報。於佛福田②若行布施諸餘善根。願我世世莫入涅槃。以此善根不入涅槃無有是處。③是人雖不樂求涅槃。然於佛所種諸善根。我說是人必入涅槃。」(SZ.39 no.705 p.250c, Ⅱ.7-11) と同文例が見られる。とくに、道世撰(CE.668)『法苑珠林』卷第三十七にも「又大悲經云。①佛告阿難。若人樂著三有果報。於佛福田②若行布施諸餘善根。願我世世莫入涅槃。以此善根不入涅槃。無有是處。③是人雖不樂求涅槃。然於佛所種諸善根。我說是人必入涅槃也。」【T.53 p.581 脚註⑩】「諸餘=餘諸」(T.53 no.2122 p.581c, Ⅱ.28-p.582a, Ⅱ.3) と『法華宗要』・『本業經疏』と同文例が見られる。『大悲經』の本箇所の引用は、現存する文献中、上記の三書(=『法華宗要』・『本業經疏』・『法苑珠林』)にしか見られないため、両者(=元曉・道世)の引用文例が一致することは、『法華宗要』の著述年時を論ずる上で重要な手がかりとなる。引用文中、①～③は筆者による。

⁽⁵⁰⁾ 『大正藏』の誤字。「仁和寺藏本」には「着」とあるが、『大悲經』の該当箇所に「著」とあり、『本業經疏』・『法苑珠林』にも「著」とあるため、「著」に訂正して採用する。ちなみに、写本での「着」・「著」の誤写・誤読はよくある間違いである。

莫入涅槃。以此善根不入涅槃。无有是處。是人雖不樂求涅槃。然於佛所種諸善根。我說
是人必⁽⁵¹⁾入涅槃。尼健子經一乘品⁽⁵²⁾云⁽⁵³⁾。佛語文殊我佛國⁽⁵⁴⁾土⁽⁵⁵⁾所有僧⁽⁵⁵⁾伽尼乾子等。皆
是如來住持力故。方便示現。此諸外道善男子等。雖行種種諸異學相。皆同佛法。一橋梁
度。更无餘⁽⁵⁶⁾度故。

〔訓読文〕

『大悲經』に言わく、「佛、阿難に告げたまわく、若し、人、⁽⁵⁷⁾三有の果報に樂⁽⁵⁸⁾著し、
佛の⁽⁵⁸⁾福田に於いて、若し布施と諸餘の善根を行ぜば、我が世に涅槃に入ること莫し
と願えども、此の善根を以て涅槃に入らざること、是の⁽⁵⁹⁾處有ること無し。是の人涅槃
を樂求せずと雖も、然も佛の所種の諸善根に於いて、我れ是の人必ず涅槃に入ると説く」
と。『大薩遮⁽⁶⁰⁾尼健子⁽⁶¹⁾所説經』「一乘品」に云⁽⁶²⁾わく、「佛、語らく、「文殊よ、我が佛國
土⁽⁶³⁾の所有の⁽⁵⁹⁾僧⁽⁶⁴⁾〔佉・毘世師・遮梨〕伽・尼乾子等は、皆な是れ如來の⁽⁶⁰⁾住持力の故に、
方便示現す。此の⁽⁶⁵⁾諸の外道の善男子等は、種種の⁽⁶⁶⁾諸の異學の相を行ずると雖も、皆
な佛法に同じ。一橋梁にて度し、更に餘の度无きが故なり」と。

2-2-3-2. 作因 (3)

〔原文〕 (NNJ. pp.13-14, //82-91・T.34 p.871c, //13-24・HBZ.1 p.489a, 1.24 - p.489b, 1.13)

- (51) 「仁和寺蔵本」には「入」とあり、『本業經疏』・『法苑珠林』にも「入」とあるが、『大悲經』には「得」とある。
- (52) 『大正蔵』の誤字。『大正蔵』には「言」とあるが、「仁和寺蔵本」に「云」とあるため、「云」に訂正して採用する。
- (53) 『大薩遮尼乾子所説經』一乘品(卷第二)に「文殊師利。我佛國土所有僧伽毘世師遮梨迦尼乾子等。皆是如來住持力故。方便示現。文殊師利。此諸外道善男子等。雖行種種諸異學相。皆同佛法。一橋梁度。更無餘⁽⁵⁶⁾濟故。」【T.9 p.326 脚註①】「濟=齊⁽⁵⁷⁾」(T.9 no.272 p.326b, 1.26 - p.326c, 1.1) とある。
- (54) 『大正蔵』の欠字(15/43)。「仁和寺蔵本」は破損しているが、『大薩遮尼乾子所説經』一乘品の該当箇所「土」とあり、「仁和寺蔵本」に残っている字形からも「土」と読めるため、「土」に確定して採用する。
- (55) 「仁和寺蔵本」には「伽」とあるが、『大薩遮尼乾子所説經』には「佉」(或いは「迦」か)とある。
- (56) 「仁和寺蔵本」には「度」とあるが、『大薩遮尼乾子所説經』には「濟」とある。
- (57) 【三有】欲有(欲界の生存)、色有(色界の生存)、無色有(無色界の生存)をいう。
- (58) 【福田】仏や法また教団(弟子たちのサンガ)のこと。
- (59) 『大薩遮尼乾子所説經』に「僧伽毘世師遮梨迦尼乾子等。」(T.9 no.272 p.326b, 1.27) とあるため、〔訓読文〕ではこの一文を補った。インド哲学諸学派(外道)の枚挙。【僧伽】sāṃkhyā-vāda, sāṃkhyah, grāṇs can (pa) 数論。【毘世師】vaiśeṣika, bye brag pa 勝論。【遮梨迦】cārvāka, =lokāyataḥ, ḥjig rten (rgyañ/ rgyaṅs) (pan/ phan) pa 唯物論者。【尼乾子】尼乾陀若提子。nirgrantha, gcer bu pa 裸形のジャイナ教托鉢僧。
- (60) 【住持力】adhiṣṭhāna-bala, byin gyi rlabs 加持力、神通力。如來の任持する仏智力。如來が力を加えて護持すること。(伊藤瑞叡 [2000] p.285) 参照。

案云。依此等文當知。佛法五乘諸善及。与外道種種異善。如是一切皆是一乘。皆依佛性无異躰故。如法花論顯此義云。⁽⁶¹⁾何躰法者。謂⁽⁶²⁾理无二躰。无二躰者。謂无量乘皆是一乘故。而下文言。⁽⁶³⁾汝等所行是菩薩道者。謂發菩提心退已還發者。前所修行善根不滅。同後得果故者。為顯種子无上義故。⁽⁶⁴⁾且約發心善根。而說非謂餘善不得佛果。是故⁽⁶⁵⁾不違前所引文。由是言之。若凡若聖一切衆生内道外道一切善根。皆出佛性同歸本原。如是本來唯佛所窮。以是義故廣大甚深。如是名為一乘因也。

〔訓読文〕

案じて云わく、此れ等の文に依りて、當に知るべし。佛法の五乗の諸善及び外道の種種の異善とは、是くの如く一切皆な是れ一乘なり。皆な佛性に異躰无きに依るが故なり。『法花論』に此の義を顯わして云うが如し、「何の躰の法とは、謂わく、理に二の躰無し。二の躰無しとは、謂わく、無量の乗は皆な是れ一乘なるが故なり」と。而して下の『法華論』の文に言わく、「汝等が所行は、是れ菩薩の道なり」とは、謂わく、菩提心を發して、退し已りて還た發す者は、前に修行する所の善根滅せずして、同じく後に果を得るが故なり」と[は、]。[十無上のうちの]種子の无上の義を顯わさんが為めの故に。且く發心の善根に約せば、餘の善は佛果を得ずと謂うに非ずと説く。是の故に前の所引の文に違わず。是れに由りて之れを言う。若しは凡、若しは聖、一切の衆生、内道、外道の一切の善根は、皆な佛性の同歸本原より出づる、と。是くの如きは、本來唯だ佛のみ窮むる所なり。是の義を以ての故に廣大甚深なり。是くの如きを、名づけて一乗の因と為すなり。

2-2-4. 一乗果(1)、2-2-4-1. 本有果

〔原文〕(NNJ. pp.14-15, //91-99・T.34 p.871c, l.24 - p.872a, l.5・HBZ.1 p.489b, //13-23)

一乗果者。略説有二種。謂本有果及始起果。本有果者。謂⁽⁶⁶⁾法佛菩提。如壽量品云。

⁽⁶¹⁾ 『法華論』に「何體法者。無二體故。無二體者。無量乘唯一佛乘無二乘故。」【T.26 p.15 脚註⑩】「者+(謂)㊦*」(T.26 no.1520 p.15c, //7-9) とある。

⁽⁶²⁾ 「仁和寺藏本」には「理」とあるが、『法華論』には二訳ともない。

⁽⁶³⁾ 『法華論』に「一者示現種子無上故。説雨譬喩。汝等所行是菩薩道者。謂發菩提心退已還發者。前所修行善根不滅。同後得果故。」【T.26 p.18 脚註⑪】「(何者爲十)+一者㊦」(T.26 no.1520 p.18b, //22-25) とある。また、『妙法蓮華經』藥草喩品に「汝等所行 是菩薩道」(T.9 no.262 p.20b, l.23) とある。

⁽⁶⁴⁾ 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「旦」とあるが、「仁和寺藏本」に「且」とあるため、「且」に訂正して採用する。

⁽⁶⁵⁾ 『大正藏』の欠字(16/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、残っている字形から「不」と読めるため、「不」に確定して採用する。

⁽⁶⁶⁾ [如來藏・仏性⑤・⑥・⑦]『法華論』に「八者示現成大菩提無上者。示現三種佛菩提。……三者法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變故。如經如來如實知見三界之相乃至

⁽⁶⁷⁾如來如實知見三界之相。無有生死。若退若出。亦無在世及滅度者。非實非虛。非如非異。案云。此文就一法界顯一果躰。非有躰故非實。非无躰故非虛。非真諦故非如。非俗諦故非異。如本⁽⁶⁸⁾業經云。⁽⁶⁹⁾果躰圓滿无德不備无理不周。无名无相。非一切法可得。非有躰非无躰。乃至廣說。又言。⁽⁷⁰⁾二⁽⁷¹⁾躰之外獨在无二。故是明法佛菩提果躰。

〔訓読文〕

一乗の果とは、略説するに二種有り。謂わく、⁽⁷²⁾本有の果及び始起の果なり。本有の果とは、謂わく、法佛菩提なり。「『妙法蓮華經』「如來」壽量品」に云うが如し、「如來は如實に三界の相を知見するに、生れること死すること、若しは退すること若しは出づること有ること無く、亦た在世及び滅度の者無く、實にも非ず、虚にも非ず、如にも非ず、異にも非ず」と。案じて云わく、此の文、一法界に就いて、一果の躰を顯わすなり。有躰に非ざるが故に實にも非ず、无躰に非ざるが故に虚にも非ず、真諦に非ざるが故に如にも非ず、俗諦に非ざるが故に異にも非ざるなり。『〔菩薩瓔珞〕本業經』に云うが如

不如三界見於三界故。三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。無有生死若退若出者。謂常・恒清涼不・變故。亦無在世及滅度者。謂如來藏眞如之體。不即衆生界不離衆生界故。非實非虛非如非異者。謂離四種相・故。有四種相者是無常故。不如三界見三界者。・如來能見能證眞如法身。凡夫不見故。是故經言如來明見無・有錯謬故。」【T.26 p.18 脚註⁶⁴】「者+（示現）⊙⁶⁵」【T.26 p.18 脚註⁶⁵】「變+（等義）⊙⁶⁶」【T.26 p.18 脚註⁶⁶】「恒+（清淨）⊙⁶⁷」【T.26 p.18 脚註⁶⁷】「變+（義）⊙⁶⁸」【T.26 p.18 脚註⁶⁸】「故」- ⊙⁶⁹【T.26 p.18 脚註⁶⁹】「（諸佛）+ 如來 ⊙⁷⁰」【T.26 p.19 脚註⁷⁰】「〔有〕- ⊙⁷¹」（T.26 no.1520 p.18c, l.2 - p.19a, l.2）とある。ただし、如來藏・仏性の語は引用されていない。

- ⁽⁶⁷⁾ 『妙法蓮華經』如來壽量品に「所以者何。如來如實知見三界之相。無有生死。若退若出。亦無在世及滅度者。非實非虛。非如非異。」（T.9 no.262 p.42c, ll.12-15）とある。
- ⁽⁶⁸⁾ 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「乘」とあるが、「仁和寺藏本」に「業」とあるため、「業」に訂正して採用する。
- ⁽⁶⁹⁾ 『菩薩瓔珞本業經』卷下に「佛子。果體圓滿無德不備理無不周。居中道第一義諦清淨國土。無極無名無相。非一切法可得。非有體非無體。」（T.24 no.1485 p.1020a, ll.20-21）とある。
- ⁽⁷⁰⁾ 『菩薩瓔珞本業經』卷上に「一切佛國一切佛因果。一切佛菩薩神變。亦一念一時知住不可思議二諦之外獨在无二。」（T.24 no.1485 p.1015c, ll.13-15）とある。
- ⁽⁷¹⁾ 「仁和寺藏本」には「躰」とあるが、『菩薩瓔珞本業經』には「諦」とある。おそらく、前文の「非有躰故非實。非无躰故非虛。」（T.34 no.1725 p.871c, l.29 - p.872a, l.1）に一致させるために、元曉自らが經文を改変したものと考えられる。
- ⁽⁷²⁾ 【本有種子】本性住種子。また種子 (bija) を種姓 (gotra) と言い換えて本性住種姓ともいう。阿頼耶識のなかに先天的にある種子。見道において汚れない智慧である無漏智を生じる力。【始起種子】新熏種子。習所成種ともいう。後天的に表層の行為によって阿頼耶識のなかに植えつけられた種子。『成唯識論』卷第二に「種子各有二類。一者本有。謂無始來異熟識中法爾而有生蘊處界功能差別。世尊依此說諸有情無始時來有種種界如惡又聚法爾而有。餘所引證廣說如初。此即名爲本性住種。二者始起。謂無始來數數現行熏習而有。世尊依此說有情心染淨諸法所熏習故無量種子之所積集。諸論亦說染淨種子由染淨法熏習故生。此即名爲習所成種……由此應知。諸法種子各有本有始起二類。」（T.31 no.1585 p.8b, l.23 - p.9b, l.7）とある。

し、「果躰圓滿にして、徳として備わらざること無く、理として周からざること無し。名無く相無く、一切の法得可きに非ず、有躰に非ず、无躰に非ず」と。乃至、廣説せば、又た『菩薩瓔珞本業經』に「言わく、「二躰[＝有躰・无躰]の外に、獨り二无きこと有り」と。故に是れ法佛菩提の果の躰を明かすなり。

2-2-4-2. 始起果

〔原文〕(NNJ. p.15, Ⅱ.100-104・T.34 p.872a, Ⅱ.5-10・HBZ.1 p.489b, Ⅱ.23 - p.489c, Ⅱ.5)

始起果者。謂餘二身。如論説言。⁽⁷³⁾報佛菩提者。十地行満足得常涅槃證故。如經言。⁽⁷⁴⁾我實成佛已來。无量无边百千万億那由他劫故。⁽⁷⁵⁾應化菩提者。隨所應見。而爲示現。謂出釋⁽⁷⁶⁾氏宮樹下成道。及与⁽⁷⁷⁾十方分身諸佛。如寶塔品之所廣明。

〔訓讀文〕

始起の果とは、餘の二身[＝報佛菩提・應化[佛]菩提]を謂う。『法華論』に説いて言うが如し、「報佛菩提とは、⁽⁷⁸⁾十地の行を満足して常なる涅槃の證を得るが故なり」と。

『法華論』の引く『法華經』の「如來壽量品」に言うが如し、「我れ實に成佛してより已來、无量无边百千万億那由他劫なるが故なり」と。〔また『法華論』に言わく、「應化[佛]菩提とは、隨所に應見して示現すを爲す。『法華論』の引く『法華經』の「如來壽量品」に言わく、「釋^{このかた}氏の宮を出でて」と。〕樹下に成道したもう、と。及

- (73) 『法華論』に「二[●]者報佛菩提。十地行満足得常涅槃證故。如經善男子我實成佛已來无量无边百千萬億那由他劫故。」【T.26 p.18 脚註④】「者+(示現)㊦*」(T.26 no.1520 p.18c, Ⅱ.6-8)とある。
- (74) 『妙法蓮華經』如來壽量品に「爾時世尊。知諸菩薩三請不止。而告之言。如等諦聽。如來祕密神通之力。一切世間天人及阿修羅。皆[●]謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮。去伽耶城不遠坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成佛已來。无量无边百千萬億那由他劫。」【T.9 p.42 脚註⑤】「謂=爲㊦」(T.9 no.262 p.42b, Ⅱ.7-13)とある。元曉は『妙法蓮華經』ではなく、『法華論』所訳の『法華經』の經文を引用している。
- (75) 『法華論』に「一者應化佛菩提。隨所應見而爲示現故。如經皆謂如來出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提故。」(T.26 no.1520 p.18c, Ⅱ.3-6)とあるが、元曉は『法華論』の「應化佛菩提」より「出釋氏宮」までを地の文として用いている。引用文中、「如經」以下の対応関係は前掲の註(74)参照。
- (76) 「仁和寺藏本」の欠字。「仁和寺藏本」にはないが、『妙法蓮華經』如來壽量品・『法華論』の該当箇所に「氏」とあるため、「氏」を補填して採用する。
- (77) 『妙法蓮華經』見寶塔品に「是時大樂說菩薩。以如來神力故。白佛言。世尊我等願欲見此佛身。佛告大樂說菩薩摩訶薩。是多寶佛有深重願。若我寶塔。爲聽法華經故出於諸佛前時。其有欲以我身示四衆者。彼佛分身諸佛。在於十方世界說法。盡還集一處。然後我身乃出現耳。大樂說。我分身諸佛。在於十方世界說法者今應當集。大樂說白佛言。世尊。我等亦願欲見世尊分身諸佛禮拜供養。」(T.9 no.262 p.32c, Ⅱ.20-29)とある。
- (78) 【十地】真理をさとした菩薩が最高のさと（無上正覺）を得ることを目指してさらに修行を進めていく十の心境・境地。

び十方分身の諸佛とを謂う。『妙法蓮華經』「寶塔品」の廣く明かす所の如し。

2-2-4. 一乗果 (2)

〔原文〕(NNJ. pp.15-16, //104-112・T.34 p.872a, //10-18・HBZ.1 p.489c, //5-15)

總而言之。一切衆生皆修万行。同得如是⁽⁷⁹⁾三菩提果。是謂一乘一乘果也。如方便品云。

⁽⁸⁰⁾舍利弗當知。我本立誓願。欲令一切衆。如我等無異。如我昔所願。今者已滿足。化一切衆生。皆令入佛道。案云。此文正明如來所願滿足。所以然者。遍化三世一切衆生。如應皆令得佛道。故如寶雲經云。⁽⁸¹⁾譬如油鉢若已平滿。更投一滲終不復受。菩薩成佛衆願滿足。亦復如是。更無減少一塵之願。

〔訓読文〕

總じて之れを言わば、一切衆生、皆な万行を修して、同じく是くの如き三〔=法佛・報佛・應化〔佛〕菩提の果を得。是れを一乗、一乗の果と謂うなり。『妙法蓮華經』「方便品」に云うが如し、「舍利弗よ、當に知るべし、我れ本と誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異なること无からしめんと欲しき、我が昔の所願の如きは、今者、已に満足しぬ、一切衆生を化して、皆な佛道に入らしむ」と。案じて云わく、此の文、正しく如來の所願満足するを明かす。然る所以は、遍く三世の一切衆生を化し、應に皆なをして佛道を得せしむるべきが如し。故に『寶雲經』に云うが如し、「譬えば、油の鉢、若し已に平滿ならば、更に一滲^{いつたい}を投ずるに終に復た受けざるが如し。菩薩成佛して衆願満足せば、亦た復た是くの如し。更に一塵の願も減少すること無し」と。

2-2-4. 一乗果 (3)

〔原文〕(NNJ. pp.16-18, //112-121・T.34 p.872a, //18-29・HBZ.1 p.489c, //15 - p.490a, //3)

大雲密藏經云。⁽⁸²⁾大雲密藏菩薩曰言。世尊。唯願如來。為未來世薄福衆生。演說如是深進大海水潮三昧。佛言。善男子。莫作是言。何以故。佛出世難。此大雲經聞者亦難。

⁽⁷⁹⁾ 『大正藏』の欠字(17/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、残っている字形から「三」と読めるため、「三」に確定して採用する。

⁽⁸⁰⁾ 『妙法蓮華經』方便品に「舍利弗當知 我本立誓願 欲令一切衆 如我等無異 如我昔所願 今者已滿足 化一切衆生 皆令入佛道」(T.9 no.262 p.8b, //4-7)とある。

⁽⁸¹⁾ 『寶雲經』卷第二に「譬如油鉢若已平滿。更投一滲終不復受。菩薩成佛衆願滿足亦復如是。更無減少一塵之願。」[T.16 p.218 脚註⑩]「滲=滴⑩⑪」(T.16 no.658 p.218c, //13-16)とある。

⁽⁸²⁾ 曇無讖(CE.385-433)訳『大方等無想經』卷第五に「爾時大雲密藏菩薩白佛言。世尊。唯願如來。為未來世薄福德衆生。演說如是深進大海水潮三昧。佛言。善男子。汝今不應作如是言。何以故。佛出世難。此大雲經聞者亦難。若有書寫受持讀誦一句一字亦復難得。云何偏為未來之人。吾當普為三世衆生廣開分別。」(T.12 no.387 p.1101a, //28 - p.1101b, //5)とある。

云何偏為未來之⁽⁸³⁾人。吾當遍為三世衆生廣⁽⁸⁴⁾門分別。花嚴經云。⁽⁸⁵⁾如來轉法輪⁽⁸⁶⁾於三世無不至。依此等文當知。諸佛初成正覺。一念之⁽⁸⁷⁾頃遍化三世一切衆生。无一不成无上菩提。如昔所願已滿足故。設有一人不成菩提。如昔所願即不滿故。雖實皆度而无盡際。雖實无际而无{不}度。以无限智力度无限衆生故。

〔訓読文〕

『大雲密藏藏經[=大方等無想經]』に云わく、「大雲密藏菩薩曰いて言わく、「世尊よ、唯だ願わくは、如來、未來世の薄福の衆生のために、是くの如き深進大海水潮三昧を演説したまえ」と。佛の言わく、「善男子よ、是の言を作す莫れ。何を以ての故に。佛、出世すること難し、此の『大雲經』を聞く者も亦た難し。云何が偏に未來の^{ひとえ}人のためとするや。吾れ當に遍く三世の衆生のために、廣き門をもて分別すべし」と。『花嚴經』に云わく、「如來の轉法輪は、三世に於いて至らざること無し」と。此れ等の文に依りて、當に知るべし。諸佛は、初めて正覺を成じ、一念の^{あいた}頃^{ひとえ}に遍く三世の一切衆生を化し、一^{ひとり}として无上菩提を成ぜざること無し、昔の所願の如きは、已に満足するが故に。設い一人有りて菩提を成ぜざれば、昔の所願の如きは、即ち滿ぜざるが故に。實には皆な度すと雖も、而も盡際無く、實には无际なれども、而も度せざること無し。无限の智力以て、无限の衆生を度せんが故に。

2-2-4. 一乗果 (4)

〔原文〕(NNJ. pp.18-19, //121-131・T.34 p.872a, l.29 - p.872b, l.11・HBZ.1 p.490a, //3-15)

而此經下文言。⁽⁸⁸⁾我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡。復倍上數。論釋此云。⁽⁸⁹⁾我本行菩

(83) 「仁和寺藏本」の欠字。「仁和寺藏本」には「人」の字を欠くが、『大方等無想經』の該当箇所「人」とあるため、「人」を補填して採用する。

(84) 「仁和寺藏本」には「門」とあるが、『大方等無想經』には「開」とある。

(85) 佛駄跋陀羅(CE.359-429)訳『大方廣佛華嚴經(六十卷)』卷第三十五に「如來轉法輪 三世無不至」(T.9 no.278 p.628a, l.9)とある。なお、元曉撰『大慧度經宗要』にも「如來轉法輪三世無不至。」(T.33 no.1697 p.71a, l.20)と同文例が見られる。

(86) 「仁和寺藏本」には「於」とあるが、『大方廣佛華嚴經(六十卷)』にはない。

(87) 「仁和寺藏本」の誤字。「仁和寺藏本」には「頃」とあるが、(李鍾益 [1987] p.57)に指摘されているように、「頃」の誤字と考えられるため、「頃」に訂正して採用する。

(88) 『妙法蓮華經』如來壽命品に「諸善男子。我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡。復倍上數。」(T.9 no.262 p.42c, //22-23)とある。

(89) 『法華論』に「我本行菩薩道今猶未滿者。以本願故。衆生界未盡願非究竟故。言未滿者。非謂菩提不滿足故。所成壽命復倍上數者。●示現如來常●命●方便顯多數過上數量不可數知故。」【T.26 p.19 脚註②】「此文+示●命」【T.26 p.19 脚註③】「命=念●命」【T.26 p.19 脚註④】「善巧+方便●命」(T.26 no.1520 p.19a, //2-6)とある。なお、元曉撰『涅槃宗要』にも「又法花論云。所成壽命復倍上數者。此文示現如來常命。以巧方便顯多數量不可數知故。」(T.38 no.1769 p.255b, //21-23)と同文例が見られる。

薩道今猶未滿者。以⁽⁹⁰⁾本願故。衆生界未盡。願非究竟故。言未滿。非謂菩提不滿足故。所成壽命。復⁽⁹¹⁾倍上數者。示現如來常命方便顯多⁽⁹²⁾數。過上數量不可數知故。此論意者。為明約今衆生未盡⁽⁹²⁾義。如是時本願未滿。非謂菩提已滿。而其本願未滿。亦非本願未滿。而說佛法已足。如花嚴經云。⁽⁹³⁾一切衆生未⁽⁹⁴⁾成菩提。佛法未足⁽⁹⁵⁾本願未滿。是故當知。願与菩提不滿足等。則已滿則等滿。如是名為一乘果也。

〔訓読文〕

而して此の『妙法蓮華經』の下の〔「如來壽量品」の〕文に言わく、「我れ本と菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命は、今猶お未だ盡きず。復た上の數に倍せり」と。『法華論』に此れを釋して云わく、「我れ本、菩薩の道を行じて、今猶お未だ滿たず」とは、⁽⁹⁶⁾本願を以ての故なり。衆生界未だ盡きざれば、願は究竟に非ざるが故に。「未だ滿せず」と言うは、菩提の不滿足を謂うに非ざるが故に。「成ぜし所の壽命は、復た上の數に倍せり」とは、如來の常命は、方便もて多⁽⁹²⁾數を顯わすことを示現す。上の數量を過ぎて數え知る可からざるが故に」と。此の『法華論』の意とは、今の衆生未だ盡きざるの義に約して、是くの如き〔久遠の〕時の本願、未だ滿ぜざるを明かさんが為めなり。〔衆生の〕菩提已に滿ずと謂うには非ず、而も其の〔久遠の佛の〕本願未だ滿ぜざればなり。亦た本願未だ滿ぜざるには非ず、而も佛法已に足ると説げばなり。『花嚴經』に云うが如し、「一切衆生、未だ菩提を成ぜず、佛法未だ足らず、本願未だ滿ぜざる」と。是の故に當に知るべし。願と菩提の滿さざること等し。則ち已に滿ずれば、則ち等しく滿ず。是くの如きを、名づけて一乘の果と為すなり。

2-2-5. 一乘法

〔原文〕(NNJ. p.19, Ⅱ.131-134・T.34 p.872b, Ⅱ.11-14・HBZ.1 p.490a, Ⅱ.16-19)

- ⁽⁹⁰⁾ 「仁和寺藏本」の誤字。「仁和寺藏本」には「位」とあるが、『妙法蓮華經』如來壽量品・『法華論』の該當箇所には「倍」とあるため、「倍」に訂正して採用する。
- ⁽⁹¹⁾ 「仁和寺藏本」の欠字。「仁和寺藏本」には「數」の字を欠くが、『法華論』の該當箇所には「數」とあるため、「數」を補填して採用する。
- ⁽⁹²⁾ 『大正藏』の欠字(18/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、残っている字形から「義」と読めるため、「義」に推定して採用する。
- ⁽⁹³⁾ 『大方廣佛華嚴經(六十卷)』卷第三十九に「一切衆生未得菩提。佛法未足。大願未滿。」(T.9 no.278 p.645c, Ⅱ.22-23)とある。
- ⁽⁹⁴⁾ 「仁和寺藏本」には「成」とあるが、『大方廣佛華嚴經(六十卷)』には「得」とある。おそらく、前文の「設有一人不成菩提。」(T.34 no.1725 p.872a, Ⅱ.27)に一致させるために、元曉自らが經文を改変したものと考えられる。
- ⁽⁹⁵⁾ 「仁和寺藏本」には「本」とあるが、『大方廣佛華嚴經(六十卷)』には「大」とある。おそらく、前文の「亦非本願未滿。而說佛法已足。」(T.34 no.1725 p.872b, Ⅱ.7-8)に一致させるために、元曉自らが經文を改変したものと考えられる。
- ⁽⁹⁶⁾ 【本願】過去の願い。根本の誓願。菩薩や如來が過去に起こした誓願をいう。

合而言之理教因果。⁽⁹⁷⁾如是四法更互相應。共運一人到薩婆若。故說此四名一乘法。猶如四馬更互相應共作一運。故說四馬名爲一乘。當知此中道理亦尔。

〔訓読文〕

合して之れを言わば、理・教・因・果なり。是くの如き四法は、更互^{きょうご}に相い應じて、共に一人を運んで、⁽⁹⁸⁾薩婆若に到ら[しむ]。故に此の四[法]を説いて、一乗の法と名づくるなり。猶お四馬の更互に相い應じて、共に一運を作すが如し。故に四馬[＝理・教・因・果]を説いて、名づけて一乗と為す。當に知るべし。此の中の道理も亦た余り。

2-2-6. 問答 I (1)

〔原文〕(NNJ. pp.19-20, Ⅱ.134-141・T.34 p.872b, Ⅱ.14-22・HBZ.1 p.490a, Ⅱ.20 - p.490b, Ⅱ.5)

⁽⁹⁹⁾問。理教及因共運衆生到薩婆若。此事可尔。果既到究竟之處。云何与三共運衆生。解云。此有四義。一者。由未來世有佛果力。冥資衆生令生善心。如是展轉令至佛地。如涅槃經云。⁽¹⁰⁰⁾以現在世煩惱因緣能斷善根。未來佛性力因緣故還生善根故。二者。當果報佛

⁽⁹⁷⁾ 『華嚴五教章指事』上卷本に「如是四法。更互相應。共運一人。到薩婆若。故說此四。名一乘法。猶如四馬[●]互相應共作一運。故說四馬。名爲一乘。當知此中道理亦爾。」【T.72 p.205 脚註⑨】「(更)+互[●]」(T.72 no.2337 p.205b, Ⅱ.29 - p.205c, Ⅱ.3)と、『華嚴一乘義私記』に「如是四法更互相應俱運一人令到薩婆若。故此四法名一乘。譬如四馬更相應俱作一運。故說四馬名一乘云云」(T.72 no.2327 p.44b, Ⅱ.18-19)と、『五教章通路記』卷第三に「如是四法。更互相應。共運一人。到薩婆若。故說此四。名一乘法。猶如四馬。更互相應。共作一運。故說四馬。名爲一乘。當知此中道理亦爾。」(T.72 no.2339 p.316a, Ⅱ.23-26)と、『華嚴五教章衍秘鈔』卷第二に「如是四法。更互相應。共運一人到薩婆若云云」(T.73 no.2345 p.640c, Ⅱ.25-26)とある。

⁽⁹⁸⁾ 【薩婆若】sarva-jñā 一切智。

⁽⁹⁹⁾ 『華嚴經文義要決問答』卷第三(二科入)に「問理教及因。共運衆生。到薩婆若。此事可爾。果理既到究竟之處。云何與共運衆生耶。答此有數義。一者未來世。有佛果身。冥資衆生。令生善心。如是展轉。重至佛地。如涅槃經云以。現在世煩惱因緣。能斷善根。未來佛性力因緣故。還生善根故。二者當果報佛。現諸應化。化今衆生令得增進。如本業經云。自見身當果。諸佛摩頂說法故。說衆生乘於果乘。果乘能運因地衆生也。」(SZ.8 no.237 p.436a, Ⅱ.19 - p.436b, Ⅱ.3)とある。参考までに、智雲(CE.-766-779-)撰『妙經文句私志記』卷第十には「次第四時正指此經所明二義三乘三法謂除其果但理教因一乘四法即足其果也經雖明二義品正從照三權智以爲名形顯四一爲真實也」(SZ.29 no.596 p.383a, Ⅱ.18-21)とある。

⁽¹⁰⁰⁾ 曇無讖(CE.385-433)訳『大般涅槃經(北本)』卷第三十五に「佛言。善男子。如諸衆生有過去業。因是業故衆生現在得受果報。有未來業以未生故終不生果有現在煩惱。若無煩惱一切衆生應當了了現見佛性。是故斷善根人。以現在世煩惱因緣能斷善根。未來佛性力因緣故還生善根。」(T.12 no.374 p.571c, Ⅱ.15-20)と、慧嚴等依泥洹經加之『大般涅槃經(南本)』卷第三十二に「佛言。善男子。如諸衆生有過去業。因是業故衆生現在得受果報。有未來業以未生故終不生果。有現在煩惱。若無煩惱一切衆生應當了了現見佛性。是故斷善根人以現在世煩惱因緣能斷善根。未來佛性力因緣故還生善根。」(T.12 no.375 p.818c, Ⅱ.14-19)とある。なお、元曉撰『涅槃宗要』にも「又言。以現在世煩惱因緣能斷善根。未來佛性力因緣故還生善根。」(T.38 no.1769 p.249a, Ⅱ.11-12)と同文例が見られる。

現諸應化。化今衆生令得増進。如⁽¹⁰¹⁾牟⁽¹⁰²⁾業經云。自見己身當果。諸佛摩頂說法。身心別行不可思議故。

〔訓読文〕

問う。理・教及び因は、共に衆生を運んで、薩婆若に到ら[しむ]。此の事、余る可し。果は、既に究竟の處に到れり。云何が三[=理・教・因]と共に衆生を運ぶや。解して云わく、此れに四義有り。一には、未來世に佛の果力有るに由る。冥に衆生を資して善心を生ぜしむ。是くの如く⁽¹⁰³⁾展轉して⁽¹⁰⁴⁾佛地に至らしむ。『涅槃經』に云うが如し、「現在世の煩惱の因縁を以て能く善根を斷じ、未來の佛性の力の因縁の故に還た善根を生ずる」故にと。二には、⁽¹⁰⁵⁾當果の報佛は、諸の應化を現じ、今の衆生を化して、⁽¹⁰⁶⁾増進を得さしむべし。『菩薩瓔珞本業經』に云うが如し、「自ら己身の當果を見る。諸佛は頂を摩して說法し、身心別して、不可思議を行ずる」故にと。

2-2-6. 問答 I (2)

〔原文〕(NNJ. pp.20-21, //141-152・T.34 p.872b, l.22 - p.872c, l.5・HBZ.1 p.490b, //5-18)

三者。此經六處授記。記當得成阿耨菩提。由得此記⁽¹⁰⁷⁾崇心進修。當果屬彼⁽¹⁰⁸⁾地得運⁽¹⁰⁹⁾故。彼下文言。⁽¹¹⁰⁾各賜諸子等一大車。四者。⁽¹¹¹⁾此經中說一切種智。无⁽¹¹²⁾累不盡无

(101) 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「乗」とあるが、「仁和寺藏本」に「業」とあり、『華嚴經文義要決問答』の引用箇所にも「業」とあるため、「業」に訂正して採用する。

(102) 『菩薩瓔珞本業經』卷下に「佛子。是故菩薩無生觀。捨三界報變易果。用入中忍無相慧。出有入無化現無常。自見己身當果。諸佛摩頂說法。身心別行不可思議。故名不動地。佛子。復入上觀光光佛化無生忍道。現一切佛身。故名妙慧地。」(T.24 no.1485 p.1018a, //19-23)とある。なお、元曉撰『本業經疏』卷下にも「自見身當果諸佛摩頂說法者。身相續所成當果」(SZ.39 no.705 p.247b, //21-22)と同文例が見られる。

(103) 【展轉】相互に関係し合うありよう。

(104) 【仏地】仏の地。菩薩が十地を順次修行して最後に至る覺者の段階。

(105) 【當果】當来の果。未來の果報。

(106) 【増進】修行が進むこと。段階を向上すること。

(107) 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「崇」とあるが、「仁和寺藏本」に「崇」とあるため、「崇」に訂正して採用する。

(108) 『大正藏』の欠字(19/43)。「仁和寺藏本」は破損しているが、残っている字形から「地」と読めるため、「地」に推定して採用する。

(109) 『大正藏』の誤字。『大正藏』には「彼故」とあるが、「仁和寺藏本」に「故彼」とあるため、「故彼」に訂正して採用する。

(110) 『妙法蓮華經』譬喻品に「舍利弗。爾時長者各賜諸子等一大車。」(T.9 no.262 p.12c, l.18)とある。

(111) 『妙法蓮華經』藥草喻品か。吉藏(CE.549-623)撰『法華統略』卷上末に「問何故云開佛知見。使得清淨。答開佛知見。謂德無不圓。使得清淨。謂累無不盡。累無不盡故。不可爲有。德無不圓故。不可爲無。即中道法身。亦是藥草喻品中。三種果義。開佛知見。即是究竟。至於一切種智。謂菩提果。使得清淨。即是究竟涅槃常寂滅相。三世諸佛。自開二果。亦令

徳不⁽¹¹³⁾備。一切衆生同到此果。衆生縁此能詮所詮。發心勝進逕四十心。遊戲神通化四生類。故說衆生乘於果乘。⁽¹¹⁴⁾果乘能運因地衆生。如下頌。⁽¹¹⁵⁾諸子是時。歡喜踊躍。乘是寶車。遊於四方。由方是四義當知。果乘與餘三法共運一人。⁽¹¹⁶⁾一人四法因縁和合。遠離諸邊不可破壞。除此更无若過若増。如是名為廣大甚深。究竟一乘真實相也。所詮之宗略述如是。

〔訓読文〕

三には、此の『妙法蓮華』經は⁽¹¹⁷⁾六處に授記す。〔授〕記さば、當に阿耨菩提を成ずるを得べし。此の記を得るに由りて、〔崇〕心に〔精〕進修〔行〕す。當果は、彼の〔地〕に屬して運ぶを得るが故に。〔彼〕の下^{おのおの}の『妙法蓮華經』「譬喩品」の〕文に言わく、「各諸子に等一の大車を賜う」と。四には、此の『妙法蓮華』經の中に一切種智を説く。〔累〕として盡くさざること無く、徳として備わらざること無し。一切衆生は、同じく此の果に到る。衆生は此の⁽¹¹⁸⁾能詮・所詮を縁じて、發心し⁽¹¹⁹⁾勝進して、逕ちに⁽¹²⁰⁾四十心。神通に遊戲

衆生得此二果。故名爲大事因縁故出現於世。」(SZ.27 no.582 p.464c, II.13-19)とあり、本箇所¹に依拠した表現と考えられる。

- (112) 『大正蔵』の欠字(20/43)。「仁和寺蔵本」に「累」とあるため、「累」に確定して採用する。また、吉藏撰『法華玄論』卷第四に「問。乘有廣狹義不。 答。五乘相望自辨廣狹今不明之也。就一乘中自論廣狹者。果乘無累不盡無徳不圓故稱廣也。因行不爾故稱爲狹。就因中自論者。初地得百法明門故狹。二地得千法明門故廣。如是可知也。」(T.34 no.1720 p.390a, II.3-8)と類似する文例が見られる。
- (113) 『仁和寺蔵本』には「備」とあるが、『法華玄論』・『法華統略』には「圓」とある。
- (114) 『大正蔵』の誤字。『大正蔵』には「果乘乗乗」とあるが、『仁和寺蔵本』には「果乗>>」とあり、『華嚴經文義要決問答』の引用箇所にも「果乘果乗」とあるため、「>>」を「果乗」に訂正して採用する。
- (115) 『妙法蓮華經』譬喩品に「諸子是時 歡喜踊躍 乘是寶車 遊於四方」(T.9 no.262 p.14c, II.17-18)とある。
- (116) 『大正蔵』の誤字。『大正蔵』には「一人人人」とあるが、『仁和寺蔵本』には「一人>>」とあるため、「>>」を「一人」に訂正して採用する。
- (117) 〔如來藏・仏性④〕『法華論』に「言授記者有六處示現。五者如來記。一者菩薩記。如來記者。●舍利弗摩訶迦葉等衆所知識故。名號不同故與別記。富樓那等五百●人千二百人等。同一名故俱時與記。學無學等俱同一號。●非衆所知識故一時與記。與提婆達多●記者。示現如來無●怨故。與比丘尼及諸天女●記者。示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故。●菩薩授記者。●如不輕菩薩●品示現。●禮拜讚歎●言。我不輕汝。汝等皆●當作佛者。●示諸衆生皆有佛性故。」【T.26 p.18 脚註②】「(謂大徳)+舍利弗○◎」【T.26 p.18 脚註③】「人+(等)○◎」【T.26 p.18 脚註④】「非=又復非是○◎」【T.26 p.18 脚註⑤】「(授)+記○◎」【T.26 p.18 脚註⑥】「怨+(惡)○◎」【T.26 p.18 脚註⑦】「(授佛)+記○◎」【T.26 p.18 脚註⑧】「(與授記)+菩○◎」【T.26 p.18 脚註⑨】「如+(下文)○◎」【T.26 p.18 脚註⑩】「品+(中)○◎」【T.26 p.18 脚註⑪】「(應知)+禮○◎」【T.26 p.18 脚註⑫】「(作如是)+言○◎」【T.26 p.18 脚註⑬】「當+(得)○◎」【T.26 p.18 脚註⑭】「示+(現)○◎」(T.26 no.1520 p.18a, I.27-p.18b, I.8)とある。ただし、如來藏・仏性の語は引用されていない。
- (118) 【能詮】經典の義理を顕わす文句をいう。顕わされる義理(所詮)の対。

し、四生類を化す。故に衆生、果乗に乗ずることを説く。**果乗**は能く因地の衆生を運ぶ。下の『妙法蓮華經』「譬喩品」の「諸子、是の時、歡喜踊躍して、是の寶車に乗りて、四方に遊ぶ」と。[四]方に由りて、是の四義は當に知るべし。果乗[＝一乗の果]と餘の三法[＝一乗の理・教・因]は、共に一人を運んで、**一人**と四法は、因縁和合して、諸邊を遠離して破壊す可からず。此れを除いて更に若しは過、若しは増無し。是くの如きを、名づけて廣大甚深なる究竟一乗の眞實相と爲すなり。所詮の宗、略述することは是くの如し。

§3. 結 論

以上、「第二弁經宗」の訳注を終える。以下では、「第二弁經宗」をめぐる諸問題について論究していきたい。

3-1. 『法華宗要』の著述動機について

元曉 (CE.617-686) は、『法華宗要』の「第二弁經宗」において、一乗の実相をこの經の根本趣旨とし、これを分別して、能乗の一仏乗の人、及び一乗の人の所乗の法という二つの観点より説いている。

能乗の一仏乗の人とは、皆な仏子にして、悉く菩薩たる、三乗 [＝声聞・縁覺・菩薩] の行人、四種 [＝決定・増上慢・退菩提心・応化] の声聞、三界所有の四生 [＝卵・胎・湿・化] の衆生と言ひ、最後に無性有情を加えている。そしてその根拠は、皆有仏性とする。

ここで注目すべきは、能乗の一仏乗の人 (2-1. 能乗一仏乘人 (1)) のなかに、無性有情が加えられているということである。さらに元曉は、一乗の四法のうち、一乗の因の性因 (2-2-3. 一乗因、2-2-3-1. 性因) を説くなかでも、「趣寂二乗・無性有情も、皆な仏性有りて、悉く當に作仏すべしと説く」と言う。

(119) 【勝進】よりすぐれた過程・段階に修行を進めること。

(120) 【四十心】元曉の現存する著述の用例からすると、例えば、元曉造『梵網經菩薩戒本私記』卷上に「心地者。能生義。所住義。是地義。地義略有三説。一云。地前四十心及地上十心。合五十心者。修行菩薩所住地。故爲心地。所住此五十地。能住是菩提心。」(SZ.38 no.683 p.274c, l.24 - p.275a, l.3) とあるように、地前の四十心 (= 十信、十住、十行、十回向) を指すものかと考えられるが詳細は不明。また、『成唯識論述記』卷第九末に「此言深者。即清淨・増上力。固即堅心勝進深固即是大菩提心 唯識眞勝義性者。簡前三勝義。非勝義勝義故。即是眞如。順決擇位識作唯識觀。求住唯識眞勝義性。此位未能伏除識相。未名求住眞唯識性。即地前四十心皆是此位。然彼已前或十萬八萬・六萬・四萬・二萬・十千劫等皆不入此位。未名清淨増上力。堅固之心未昇進故。」【T.43 p.559 脚註①】「[十萬] - ?」(T.43 no.1830 p.559a, ll.1-9) と類似する文例が見られる。

これらの事例により、元曉は『法華宗要』の「第二弁經宗」において、踏み込んだ論及はしていないが、五姓各別説について触れ、これに間接的な批判を行っているということが窺い知られる。

圓測 (CE.613-696) の言うように、五姓各別説は、玄奘 (CE.624-664) 訳⁽¹²¹⁾ (CE.649) 『佛地經論⁽¹²²⁾』を標準⁽¹²³⁾とすべきであるが、ただし、無性有情の語は、玄奘訳 (CE.659) 『成唯識論⁽¹¹⁾』においてはじめて見えるし、また、趣寂二乗の語は、慈恩基 (CE.632-682) 撰『成唯識論述記⁽³⁸⁾』においてはじめて見えることから、元曉は『法華宗要』の著述の段階で、すでに『成唯識論』・『成唯識論述記』を知っていたということになる。

しかも、一乗の四法のうち、一乗の果を本有果 (2-2-4. 一乗果 (1)、2-2-4-1. 本有果) と、始起果 (2-2-4-2. 始起果) との二種に分けて説いているのも、明らかに『成唯識論』の用語⁽⁷²⁾を借りてきたものであるから、確実にこれを知っていたと見てもよい。

ゆえに、『法華宗要』の著述年時は、『成唯識論』の訳出以降、すなわち、六五九年 (元曉四三歳) 以降と見るのできるのである。

さらに、石井公成博士の、

『海東疏』 [= 『起信論疏』] は『成唯識論』を引く『判比量論』の少し前に、すなわち五〇歳前後に著されたものと考えられる。第七識の性格を初めとして唯識説に関して精密な議論を展開する『成唯識論』を知っておれば、『海東疏』が他の經論の説との会通を試みなかったはずがない。『成唯識論』を所依とする圓測や慈恩の主著が元曉の目に触れたとしても、それは『海東疏』の成立より後のことであって、元曉の主な著作がかなり書かれた後になってのことであろう。

上記の推量⁽¹²⁴⁾にしたがえば、『成唯識論』を知っていた『法華宗要』は、『起信論疏』よりも後の著述になる訳である。

(121) 玄奘の翻訳年次については、(吉村誠 [1999b] pp.60-61 「〔圖表〕玄奘の翻譯進行狀況」) 参照。

(122) 『佛地經論』卷第二に「無始時來一切有情有五種[●]性。一聲聞種[●]性。二獨覺種[●]性。三如來種[●]性。四不定種[●]性。五無有出世功德種[●]性。如餘經論廣說其相。分別建立前四種[●]性。雖無時限然有畢竟得減度期。諸佛慈悲巧方便故。第五種[●]性無有出世功德因故。畢竟無有得減度期。諸佛但可爲彼方便示現神通。說離惡趣生善趣法。彼雖依教勤修善因得生人趣。乃至非想非非想處。必還退下墮諸惡趣。諸佛方便復爲現通說法教化。彼復修善得生善趣。後還退墮受諸苦惱。諸佛方便復更拔濟。如是展轉窮未來際。不能令其畢竟減度。」[T.26 p.298 脚註①]「性=姓[㊦][㊧][㊨]」(T.26 no.1530 p.298a, ll.12-24) とある。

(123) 「唯識学派の五姓各別説は『瑜伽論』を典拠としている。ただし、五姓は各所に断片的に説かれており、それらを総合して初めて五姓が揃うことになる。これに対し、『仏地經論』には五姓のすべてを列挙した記述があり、圓測が「依仏地論。有五種[姓]。義如常説。」[SZ.21 no.369 p.270c, ll.8-9]と述べるように、唯識学派において五姓各別説の標準とみなされていた。」(吉村誠 [1999a] p.181) 参照。

(124) (石井公成 [1996] p.197) 参照。(藤能成 [1998] p.131) にも同様の指摘がある。

ところで、われわれは元曉の思想を和諍⁽¹²⁵⁾と言う。ことに彼は、新・旧両訳によって生じた教義上の問題を融和・会通することに努めていた。その証左に、元曉の現存する二十二部⁽¹²⁶⁾の著述には、そのほとんどから玄奘訳の引用が確認されている⁽¹²⁷⁾。

周知の如く、『法華經』には、如来蔵・仏性の語は見当たらない。しかしながら、世親によって読み込まれた『法華經』における如来蔵仏性思想は、『法華論』において顕現されており⁽¹²⁸⁾、元曉は、まさしくこの『法華論』の如来蔵仏性思想を論拠 [=①・④・⑥]

(125) 「その宗旨の根本は融会（和会）の思想にある。とくにそれは「和諍」という言葉によって表される。彼のあらゆる著書を貫く思想はまさしくこれであり、この根本思想がそれぞれの著書にさまざまな形であらわれているにすぎない。たとえば、『大慧度経宗要』では実相と無相とが、『涅槃経宗要』では涅槃の体と用とが説かれ、『金剛三昧経論』では一切衆生同一本覺を、『起信論疏』では一心の本源を、『起信論別記』では真俗平等を説いている。元曉がさまざまな經典に注釈したのは、全仏教を和会・綜合するためであった。」（鎌田茂雄 [1987] pp.79-80）

(126) （鎌田茂雄 [1987] pp.78-79）参照。

(127) （福士慈稔 [2004] pp.172-174）参照。ただし、後述するように、『阿毘達磨俱舍論』（以下、『俱舍論』）・『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下、『婆沙論』）・『成唯識論』の調査に関しては問題がある。崔鉉植博士は、元曉と義寂との関係を論ずるなかで、「ところで、ここで問題になるのは、義寂と元曉との相互関係をどのように見るかというところにある。既存の研究では、浄土教学、菩薩戒思想、般若経観などの側面において、両者は思想的に相通じるところがあるということを明らかにしながら、主に、義寂が元曉の思想に影響を受けたというふうに理解してきた。しかしこれは、両者の思想を具体的に比較検討した上でというよりは、義寂が義相に修学したという事実だけで、直ちに元曉の後輩に想定したことによる評価に過ぎない。具体的に検討してみれば、両者の立場と理論的な枠組みとは、おのおの独創的な様相が見受けられる。すなわち、義寂は法相宗の立場から、法相宗の理論と新訳の唯識学論書とを重用するのに対して、元曉は法相宗の理論とは区別される独自の論理を展開して、新訳の論書はほとんど活用していない。これは、直接中国で留学して玄奘の門下として修学した義寂と、新羅の国内において伝統的な教学体系を修学した元曉との思想的な基盤の相違を反映するものとみることができる。先に検討したように、義寂の活動時期は、一般的に理解されていることより早い7世紀中盤である可能性が高く、これは元曉の活動時期とほぼ同じである。若い時期にそれぞれ中国と新羅とでおのおのが異なる思想体系を樹立した両者の関係については、より精密な検討が必要であろうと考えられる。」と、元曉は新訳論書をほとんど活用していないとするが、これは誤解である。（崔鉉植 [2003] p.62）参照。引用文は、筆者による和訳。

(128) 『法華論』に見える九つの如来蔵・仏性の語は、（藤井教公 [2001] pp.353-354）に指摘される、以下のとおりである。〔如来蔵・仏性①～⑨〕①「五者無量種成就説不可盡。如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故。實相者。謂如來藏法身之體不變[●]故。」【T.26 p.15 脚註①】「〔義〕+故②」(T.26 no.1520 p.15b, Ⅱ.16-19)、②「二者同義。以聲聞辟支佛佛法身平等故。如經欲示衆生佛知見故出現於世故。法身平等者。佛性法身更無差別故。」(T.26 no.1520 p.16b, Ⅱ.24-27)、③「三者身平等。多寶如來已入涅槃。復示現身自身他身法身平等無差別故。●是無煩惱人。染慢●見彼此身所作差別。以不知彼此佛性法身●平等故。」【T.26 p.18 脚註②】「是=如是三種③」【T.26 p.18 脚註③】「見=之心現④, =之心見⑤」【T.26 p.18 脚註④】「〔悉〕+平等⑥」(T.26 no.1520 p.18a, Ⅱ.15-19)、④「我不輕汝。汝等皆●當作佛者。●示諸衆生皆有佛性故。」【T.26 p.18 脚註⑤】「當+(得)⑦」【T.26 p.18 脚註⑥】「示+(現)⑧」(T.26 no.1520 p.18b, Ⅱ.7-8)、⑤「三●者法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不●變故。如經如來如實知見三界之相乃至不如三界見於三界故。」【T.26 p.18

に、皆有仏性説〔＝一切皆成仏〕と、五姓各別説〔＝一分不成仏〕とに二分化されていた当時の仏教界を『法華宗要』を通じた『法華經』の一乗の実相でもって融和・会通し、ここに、新訳によってもたらされた五姓各別説を和諍しようとしたのである。

こうしてみると、『法華宗要』において『法華論』が如何に重要な位置と役割を果たしていたかということを知ることができるのである。

とくに、元曉の『法華宗要』における『法華論』引用の特色と言え、時には、(1)『法華論』の本文を地の文⁽⁷⁵⁾として用いたり、(2)『妙法蓮華經』の經文ではなく、『法華論』所訳の『法華經』の經文⁽¹²⁹⁾を引用したりするなど、『法華經』注釈書のあり方としては極めて異様とも言える態度が取られていることである。

また、『法華宗要』は、『法華論』の二訳のうち、勒那摩提訳本が用いられており、この点からすれば、(1)勒那摩提訳本を用いた『法華宗要』と、(2)菩提留支訳本に類似⁽²⁷⁾する『金光三昧經論』・『涅槃宗要』との両群の間には、著述の先後関係までは確定できないが、時期的な隔たりの存することが予測される。

「訳注(1)」において言及したとおり、元曉は、吉藏(CE.549-623)の「法華經疏」に重きをおいている。それはおそらく、『法華經』の如来蔵仏性思想を『法華宗要』の中心課題の一つにしていた元曉にとって、智顗(CE.538-597)・灌頂(CE.561-632)よりも、「晚見法華論」として『法華論』を重用⁽¹³⁰⁾する、吉藏の『法華論』に対する理解のほうがより適していたからかも知れない。

吉津宜英博士は、元曉を評して「超一乗主義者⁽¹³¹⁾」という。かつて、吉藏と智顗・灌頂とが乗り越えるべき論敵、法雲(CE.467-529)に対して『法華論』を用いて論駁⁽¹³²⁾していたように、元曉もまた、新訳の主たる玄奘とその教学を継承し体系づけた門人、圓測(不定種姓)や慈恩基(無性有情・定性二乗)などを相手に、『法華論』の如来蔵仏性思想を用いて当時の仏教界の争点であった五姓各別説を和諍すべく、能乗の一仏乗の人

脚註④】「者+(示現)㊦㊧*」【T.26 p.18 脚註⑤】「變+(等義)㊦㊧」(T.26 no.1520 p.18c, 11.8-11)、⑥「三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。」(T.26 no.1520 p.18c, 11.11-12)、⑦「亦無在世及滅度者。謂如來藏眞如之體。不即衆生界不離衆生界故。」(T.26 no.1520 p.18c, 11.13-14)、⑧「*言阿耨多羅三藐三菩提者。以離三界中分段生死。隨分能見眞如佛性。名得菩提。非謂究竟滿足。如來方便涅槃故。」【T.26 p.19 脚註⑩】「(此)+言㊦㊧」【T.26 p.19 脚註⑪】「性+(者)㊦㊧㊨」【T.26 p.19 脚註⑫】「故=也㊦」(T.26 no.1520 p.19b, 11.2-4)、⑨「法力應知。其心決定知水必近者。受持此經得佛性水。成阿耨多羅三藐三菩提故。」【T.26 p.19 脚註⑬】「力+(如經)㊦㊧」(T.26 no.1520 p.19b, 11.21-22)。①～⑨の番号は、本稿との対応関係を示す。

(129) 前傾の註(25)・(34)・(74)参照。

(130) (奥野光賢[2002] pp.37-57) 参照。

(131) (吉津宜英[2003] p.334) 参照。

(132) (藤井教公[2001] pp.355-357) 参照。

のなかに、無性有情を規定し、一衆生も仏子に非ざることなく、衆生界を離れずして如来蔵有るがゆえに、彼の作仏を認め、また、一乗の人の所乗の法のうち、一乗の因の作因を説くなかでは、一切衆生所有の仏性たる性因⁽³⁷⁾のゆえに、趣寂二乗・無性有情の作仏を認めたのである。

したがって、「皆な仏性有りて、悉く応に作仏すべき」ことを主張せんこと、これこそが元曉の『法華宗要』の著述動機の一つになる訳である。そしてその批判の方向先は、圓測よりも、無性有情・定性二乗の不成仏を主張した慈恩基のほうに向けられていたことが推察される⁽¹³³⁾。なお、元曉の『大慧度經宗要』における批判の対象も慈恩基であるとする指摘がある⁽¹³⁴⁾。

3-2. 一乗の四法について

一乗の人の所乗の法では、理・教・因・果という四つの観点より一乗の四法が説かれている。この一乗の四法については、塩田義遜博士による、

第二に經の宗旨を弁じて……能乗の一仏乗を以て如来蔵仏性悉是菩薩となし、かゝる一乗の人所乗の法たる仏性に、理教因果の四種ありと説けるは、先に法雲が義記三に四仏知見即ち四一を果人教因(三三六〇三⁽¹³⁵⁾)に配し、天台が理人教行(三四五⁽¹³⁶⁾)に約せるに見れば、恰かも理教を天台に取り、因果を法雲に取れるものとも解せらるゝのである。

(133) 「両者の五姓各別説には多少の違いがあり、圓測の関心が主に不定種姓に向けられているのに対し、基の議論は無性有情に中心が置かれている。」「圓測は不定種姓の成仏に関心を向けていた。一切皆成説の典拠となった『涅槃經』や『法華經』の本文は、ほとんどが五姓各別説では不定種姓の成仏を説くものと解釈される。圓測はこの解釈を徹底することが、一切皆成説に対する批判になると考えたのであろう。これに対し、基は無性有情や定性二乗の不成仏に関心を注ぎ、その論証に努めることで一切皆成説に対抗しようとした。基が当時批判的であった一分不成仏説をあえて強力に主張したのは、それこそが新訳の唯識説に独自の教義であると考えていたからであろう。」(吉村誠 [2004] p.244, p.255) 参照。

(134) (師茂樹 [2000] p.109) 参照。

(135) 法雲(CE.467-529)撰『法華義記』卷第三に「所以者何。諸佛世尊唯以一大事因緣故此下是第四顯一。此所以者。何義得釋上開三之意。文則屬下顯一廣明四一。先明果一二明人一三明因一四明教一也。明果一者即會昔日三果終成今日一果。明人一者即會昔日三人成今日一菩薩人。明教一者即會昔日三乘別教成今日一教。明因一者即會昔日三乘人所行之行只是一因以對一佛果。是故言汝等所行是菩薩道。」(T.33 no.1715 p.603a, ll.15-23) とある。

(136) 智顗說灌頂述『妙法蓮華經文句』卷第四上に「若略和舊作四一者。數同義異。舊云果一今言理一。依義依文。依義者。若無理一。衆事顛倒悉是魔說。非復佛經。故須理一。依文者。文稱佛知見。今取所知見。所見即諦所知即境。境諦即實相之理。故名理一。舊云因一今云行一。因語單義別。行一語通收得因果。故言行一。人一教一與彼同。」(T.34 no.1718 p.51a, ll.16-23) とある。

上記のような興味深い見解⁽¹³⁷⁾もある。しかし法雲は、四仏知見の開示悟入それぞれに果・人・因・教を配当しておらず、開示悟入は、「果一」のなかにおいて結ばれ⁽¹³⁸⁾、また、智顗・灌頂も、理・人・行[＝法雲の因・果に相応]・教中、「理一」のなかにおいて開示悟入を結成している⁽¹³⁹⁾。それに、元曉の説く一乗の四法、すなわち、理・教・因・果とは、そもそも四仏知見の開示悟入を念頭においたものではなく、開示悟入のうち、少なくとも、開・示については、「第三明能詮用」において詳説しているため、天台から理教を、法雲から因果を取ったと見るこの推論は成り立たない。

しかしながら、一乗の四法として、理・教・因・果を立てる元曉の説は、用語は少しく異なるといえども、基本的なフォームは相似するものがあり、塩田義遜博士の示唆の如く、このような伝統的な解釈をもとに構築された可能性は十分に考えられるため、むしろ、これを元曉流のアレンジが加わったものと言い換えたほうが無難かも知れない。

元曉の一乗の四法と類似する文例としては、吉藏の『法華玄論⁽¹⁴⁰⁾』や慈恩基の著述の随所に見られる、教・理・行・果⁽¹⁴¹⁾などが指摘できるが、これらとの関連性については、現段階では不明とせねばならない。なお、開示悟入に一乗の四義を配当するのは、慧淨(CE.578-645?)によってはじめて考案されたもののようで、慧淨は開示悟入のそれぞれに一乗の果・体・障・因を配している⁽¹⁴²⁾。

⁽¹³⁷⁾ (塩田義遜 [1960] pp.338-339) 参照。また、(任禹植 [1983] p.647) にも、同趣の指摘がある。引用文中、太字は筆者による。以下同様。

⁽¹³⁸⁾ 『法華義記』巻第三に「舍利弗是爲諸佛唯以一大事因緣故出現於世。此是第四結果一也。」(T.33 no.1715 p.603c, ll.20-22) とある。

⁽¹³⁹⁾ 『妙法蓮華經文句』巻第四上に「從舍利弗是爲諸佛以一大事下。卽是結成理一義也。昔方便教。亦得義論開示悟入而非佛知見故是權。今明佛知見故是實。實卽理一也。」(T.34 no.1718 p.51c, ll.25-28) とある。

⁽¹⁴⁰⁾ 『法華玄論』巻第一に「復次欲明三引法門故說是經。一者如來出世之始竟法華之前。引九十六種邪見及在家衆生。歸五乘正法。二者引五乘之異同歸一乘。卽法華初段意也。三引一乘之因歸法身之果。此經後段意也。此之三引無教不收無理不攝。今具明三引究竟法故說是經也。」(T.34 no.1720 p.365c, ll.22-28) とある。

⁽¹⁴¹⁾ 基撰『妙法蓮華經玄贊』巻第一本に「又云說佛智慧。故諸佛出於世。故知佛果正智亦名一乘。由此總言大乘教・理・行・果俱有出二乘濁水蓮華之德。教有能敷妙理之功。理有所敷出水之力。行有因敷趣果之相。果有結實爲因之能故也。」(T.34 no.1723 p.658a, l.28 - p.658b, l.4) とあるほか、『觀彌勒上生兜率天經贊』、『說無垢稱經疏』、『大乘百法明門論解』、『大乘法苑義林章』、『勝鬘經述記』、『大乘阿毗達磨雜集論述記』、『大乘百法明門論贊言』においても見られる。

⁽¹⁴²⁾ 慧淨(CE.578-645?)述『妙法蓮華經續述』の抄出である『妙法蓮華經論義』には「開示悟入者。依四義說。[開]者依無上義。一切智唯佛獨有。開此智見。開一乘果也。示者依同義。佛性法身三乘同有。示此知見。示一乘體也。悟者依不知義。不知眞實處。悟此知見。悟一乘[障]也。入者依不退義與無量智業。入此知見。入一乘因也。所爲衆生。卽一乘攝。如是四義。一開覺體。二示覺緣。三悟覺[障]。四入覺因。」(S.6494 p.10, ll.183-188) とある。(拙稿 [2010] p.121) 参照。

ともかく、元曉と慈恩基、とくに『妙法蓮華經玄贊』(以下、『玄贊』)との関係、及び元曉と慧淨の『妙法蓮華經續述』(以下、『續述』)との関係については、今もなお不明な点が多く、今後の研究を俟たねばならない。ちなみに、義寂(CE.-702-) 釈義一撰『法華經論述記』(以下、『論述記』)には、慈恩基の『玄贊』からの引用が多数⁽¹⁴³⁾見られるため、当然のことながら『論述記』は『玄贊』以降の著述になる。

3-3. 『法華宗要』の著述年時について

元曉の現存する二十二部の著述のうち、わずかにその著述年時が分かるものは、共に二度に亘って入唐を試みるほど、元曉とは格別な関係にあった義湘(CE.625-702)が、唐での留学を終え新羅に還ってきたちょうどその年⁽¹⁴⁴⁾に著された『判比量論⁽¹⁴⁵⁾』(CE.671, 元曉五五歳)一部に過ぎず、本書以外にはまったく分かっていない。

『法華宗要』に関しては、従来、本文中に典拠を明かした玄奘訳『解深密經』(CE.647, 元曉三一歳)からの引用が見られることから、一先ず、それ以降の著述と看做されてきた訳であるが、その著述年時までは推定できていなかった。

しかしながら、先述したとおり、元曉が『法華宗要』の著述の段階で、すでに『成唯識論』(CE.659, 元曉四三歳)を知っていたことは明らかであり、そのために『法華宗要』の著述年時は、現在の推定よりも大幅に動きうる可能性が出てきたのである。

さて、「訳注(1)」において言及したとおり、「第二弁經宗」のなかからは、『法華宗要』の著述年時に関する新たな見解を、一定の基準を提示しうることができる。

すなわち、一乗の因の作因(2-2-3-2. 作因(2))を説くなかで、論拠の一つとして挙げている『大悲經』からの引用文例⁽⁴⁹⁾がそれである。

したがって以下では、『法華宗要』を元曉の後期(CE.668f., 元曉五二歳以降)の著述として加えるべき一つの可能性について論究していきたい。

⁽¹⁴³⁾ (三友健容[2005] pp.135-140) 参照。『法華宗要』の「第二弁經宗」における『法華經論述記』との類似文例については、前掲の註(4)参照。なお、元曉と義寂との関係については、(崔鉉植[2003] p.62)に言及されており、該当箇所はその和訳を前掲の註(127)に付しておいた。

⁽¹⁴⁴⁾ 一然(CE.1206-1289)撰(CE.1284f.)『三國遺事』卷第三「然據浮石本碑。湘武德八[CE.625]年生。●卅歳出家。永徽元[CE.650]年庚戌。與元曉同伴欲西入。至高麗有難而迴。至龍朔元[CE.661]年辛酉入唐。就學於智儼。總章元[CE.668]●年。儼遷化。咸亨二[CE.671]年。湘來還新羅。長安二[CE.702]年壬寅。示滅。年七十八。」【T.49 p.994 脚註④】「卅=二十?」【T.49 p.994 脚註⑤】「年+(戊辰)ヵ㊟」(T.49 no.2039 p.994b, l.26 - p.994c, l.2)とある。「以[上]は一然禪師の弟子、無極(宝鑑国師、混比)の付記である。」(金思燁[1976] p.266) 参照。

⁽¹⁴⁵⁾ 元曉述『判比量論』に「咸亨二[CE.671]年歲在辛未七月十六日住行名寺著筆祖訖」(SZ.53 no.860 p.953b, ll.19-20)とある。

『法華宗要』における『大悲經』からの引用文例は、『大悲經』の經文をそのまま引用したものではなく、三箇所に分かれている經文を集約・再編して一つ經文にまとめ上げたものである。現存する文献に限れば、これとまったく同じ引用文例が見られる文献は、同じく元曉の著述の『本業經疏』と、道世の『法苑珠林』とである。つまり、この引用文例に関しては、両者のどちらかが一方をそのまま引用したと見るのが最も簡明な答になるであろう。

いわば仏教事典である『法苑珠林』は、六六八年⁽¹⁴⁶⁾の成立とされているため、

- ① 道世が『法苑珠林』において、元曉の『本業經疏』乃至は『法華宗要』を参照した場合、『本業經疏』乃至は『法華宗要』の著述年時は、六六八年以前となり、反対に、
- ② 元曉が『本業經疏』乃至は『法華宗要』において、道世の『法苑珠林』を参照した場合、『本業經疏』乃至は『法華宗要』の著述年時は、六六八年以降になる訳である。

①の場合は当然、元曉の『本業經疏』乃至は『法華宗要』が六六八年以前に、唐に流入していたということとなり、その背景の一つとしては義湘の存在が想定されよう。

ちなみに、一度は入唐を試みたものの諦めざるを得なかった六五〇年に元曉は三四歳、その後、義湘が入唐した六六一年に元曉は四五歳、『法苑珠林』が成立した六六八年に元曉は五二歳、義湘が帰還した六七一年に元曉は五五歳である。

したがって、義湘が媒介となり、彼によってもたらされた『法苑珠林』を元曉が『本業經疏』乃至は『法華宗要』において参照したとすれば、②の場合も、その可能性がない訳ではない。

ゆえに、この『大悲經』の引用文例という事例でもって、従来はっきりとした年時を提示することができなかった元曉の『本業經疏』乃至は『法華宗要』の著述年時に対して、六六八年という基準を提示することができるのである。

それでは、①と②とのどちらの場合により可能性が見込まれるのであろうか。この問題については、①・②の場合に限らずとも、以下のような可能性が考えられる。

- ◎ 『大悲經』の異本 — 『大悲經』に内容が違うテキストがあって、これを両者が引用した可能性。

しかし、『大悲經』に異本の存在は知られていない。

- ◎ 先行文献からの引用 — すでに散逸して現在では確認できないが、元曉・道世より先行する先学のある文献からそれぞれが引用した可能性。

確認できない以上は、可能性の域を出ない。

- ① 道世の引用 — 道世が『法華宗要』・『本業經疏』を引用した可能性。

⁽¹⁴⁶⁾ (川口義照 [2000] pp.152-156)

仏教事典とも言える『法苑珠林』の性格上大いにありうることを考えられる。とくに、『法苑珠林』における僧伽提婆訳(CE.391)『三法度論』の引用文例は、原典よりも慧淨の『續述』に類似していることが指摘できる⁽¹⁴⁷⁾。しかし、元曉もまた、『法華論』所訳の『法華經』の經文を引用しているため、道世の引用とは決め兼ねる。

② 元曉の引用 — 元曉が『法苑珠林』を引用した可能性。

元曉の、とくにタイトルを『宗要』とする著述の場合、『法華宗要』が吉藏の『法華玄論』の構造を、また『法華遊意』の内容を引用し、『涅槃宗要』が淨影寺慧遠(CE.523-592)の『大乘義章』を底本にしているという指摘⁽¹⁴⁸⁾があるように、元曉は、先行文献を大いに活用するといった傾向が見られるため、この可能性も否定できない。

しかしながら、両者とも著述スタイルに類似するものがあり、①・②のいずれの場合もその可能性は否定できないため、現段階ではこれ以上突き詰めることができない。

ともあれ、『法華宗要』の著述年時に六六八年という基点を設けることができたため、この基準をもとに、今後さらに検討を加えていけば、元曉著述の著述年次に対する多く謎が解明できるものと考えられる。

3-4. 元曉著述の編年史考

元曉著述の編年史については、管見の及ぶ限り、石井公成博士(以下、石井説)と、福士慈稔博士(以下、福士説)とによる注目すべき研究成果がある⁽¹⁴⁹⁾。

前者(石井説)は、著書の「著作の成立順序」の項において、『起信論疏』を機軸とした本書の内容による他書との関係を検討し、また後者(福士説)は、著書の「元曉の著述の撰述年次」の節において、①玄奘による新訳經論の引用状況、②『三國遺事』における元曉関連の記事内容、③『法華經』を引用する元曉著述での天台の教判・止観の影響の有無という三点を総合し、それぞれがその要約的な結論として、元曉著述の先後関係を図式でもって示している。

石井説は、『起信論別記』から『金剛三昧經論』までを、

『起信論別記』→『一道章』→『二障義』→『起信論疏』→『金剛三昧經論』

という順に推定しているが、この見解は、自著における引用関係 [= 自らの他の著述に

⁽¹⁴⁷⁾ (拙稿 [2010] p.111, 註(8)) 参照。

⁽¹⁴⁸⁾ (木村宣彰 [1977] pp.49-53) 参照。また、藤井教公教授からは、『涅槃宗要』における『大般涅槃經』の引用文例には、原典からの引用ではなく、慧遠述『大般涅槃經義記』からの引用が見られるというご指摘を頂いた。記して深く感謝申し上げる次第である。

⁽¹⁴⁹⁾ (石井公成 [1996] pp.191-216)、(福士慈稔 [2004] pp.172-180) 参照。

説明を譲っている箇所] から見ても妥当なものと判断される⁽¹⁵⁰⁾。

しかし、福士説には若干問題がある。すなわち、福士説①において指摘される、玄奘訳のうち、『俱舍論』 [= 『涅槃宗要』・『彌勒上生經宗要』・『佛說阿彌陀經疏』・『中邊疏』]、『婆沙論』 [= 『中邊疏』]、『成唯識論』 [= 『梵網經菩薩戒本私記』・『兩卷無量壽經宗要』・『中邊疏』] からの引用が見られるとする著述に関しては、筆者の再検討の結果、そのような引用は確認できない⁽¹⁵¹⁾。

また、福士説③において示されている、

(a)『法華宗要』・『大慧度經宗要』→ (b)『起信論疏』→ (c)『金剛三昧經論』
→ (d)『涅槃宗要』・『彌勒上生經宗要』

(a)と(b)の区別は、『大慧度經宗要』著述時には天台の教判を引用せずに、『起信論疏』の時に天台の止観を参照していることによって区分したものである。筆者は『大慧度經宗要』著述時には、元曉の手元に天台の典籍が伝わっていなかったものと考えている。

という順であるが、(a)の『法華宗要』はともかく、『大慧度經宗要』の場合、関口真大博士の指摘⁽¹⁵²⁾のように、『起信論疏』は、智顗述 (CE.578f.)『修習止観坐禪法要』(通称『天台小止観』)を引用する最も早い文献とされていることから、確かに彼が『起信論疏』の著述の段階で、天台を知っていたことは明白な事実である。

しかし、先述したように、元曉は『起信論疏』の著述の段階では、未だ玄奘訳 (CE.659,

⁽¹⁵⁰⁾ 「元曉は、『起信論』を中心として新旧の經論を学ぶうちに、①和会の思想と方法を確立し、まず『別記』を著わした。ついで個々の問題について新旧の諸説を整理し直す必要を感じ、『起信論』の網格に基づいて②『一道章』や『二障義』を著わすかわら、③『起信論』と思想的に近い經論を精読して注釈を加えた。こうした過程の中で、新旧の仏教に対する理解を深めた元曉は、次第に仏の広大な世界やそこへ至るための実践に心を惹かれるようになった。そこで④元曉は改めて『起信論』に取り組み、実践の面を強く意識しつつ一心二門を解釈し直し、一切の教理と修行の統括を試みた。しかし、『海東疏』は『別記』より簡略になっている所や、自らの他の著作に説明を譲っている箇所が少なくないことから見て、元曉には自らの学問のすべてを盛り込んだ膨大な注釈書を書く意図はなかったものと思われる。」(石井公成 [1996] pp.210-211) 参照。引用文中、①～④は筆者による。

⁽¹⁵¹⁾ 『涅槃宗要』の『俱舍論』は、眞諦 (CE.499-569) 訳 (CE.563-567)『阿毘達磨俱舍釋論』巻第一 (T.29 no.1559 p.166bc) からの引用であり、『彌勒上生經宗要』の『俱舍論』は、『俱舍論』ではなく、眞諦訳 (CE.559)『佛說立世阿毘曇論』巻第九 (T.32 no.1644 p.217ab) からの引用であり (作者未詳の『佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經述贊』にも同文例が見られる)、『佛說阿彌陀經疏』には、『俱舍論』からの引用はなく、『中邊疏』の『俱舍論』は、眞諦訳『阿毘達磨俱舍釋論』巻第十八 (T.29 no.1559 p.284b) からの引用である。また、『中邊疏』の『婆沙論』は、浮陀跋摩訳 (CE.437)『阿毘曇毘婆沙論』巻第三 (T.28 no.1546 p.25b) からの引用である。なお、『梵網經菩薩戒本私記』・『兩卷無量壽經宗要』・『中邊疏』には、『成唯識論』からの引用は確認できない。

⁽¹⁵²⁾ (関口真大 [1974] p.6) 参照。

元曉四三歳)『成唯識論』を知らなかった。つまり、『起信論疏』は、六五九年以前の著述になる訳である。

しかしながら、『大慧度經宗要』(T.33 no.1697 p.69b)には、玄奘訳(CE.663, 元曉四七歳)『大般若波羅蜜多經』(T.7 no.220 p.990b)からの引用が認められる。

すなわち元曉は、『大慧度經宗要』の著述の段階で、すでに天台を知っていたということになる。よって、(a)と(b)の区分は成り立たない。

しかしながら、この場合、福士慈稔博士の、

法華經引用の著述の中で『大慧度經宗要』・『涅槃宗要』が教判論を論ずる場合に集中し『法華經』を引用しているのであるが、『涅槃宗要』のみが智顗の名を記していることが興味深い。そして、現在断片しか残っていないが、元曉の『華嚴經疏』の教判観が大いに天台の影響を受けているという澄観の説も見逃すことはできない。

ここで、教判を論じている『法華經宗要』・『大慧度經宗要』・『涅槃宗要』・『華嚴經疏』の四書を天台の教判を出していない『法華經宗要』・『大慧度經宗要』と智顗の名を出している『涅槃宗要』及び天台の教判観の影響を受けているとされる『華嚴經疏』とに峻別することも可能と思われる。

上記の指摘⁽¹⁵³⁾に対する回答を示さねばならない。

この問題に対して筆者は一応、中国の教相判釈論については、主に、『大慧度經宗要』・『涅槃宗要』において扱い、『法華宗要』においては、中国の教判論とは似て非なるインド瑜伽行派の三転法輪説について別途に集中的に扱ったため、そのために『法華宗要』には天台の教判の影響が見られないのではないか、という推論を立てている。

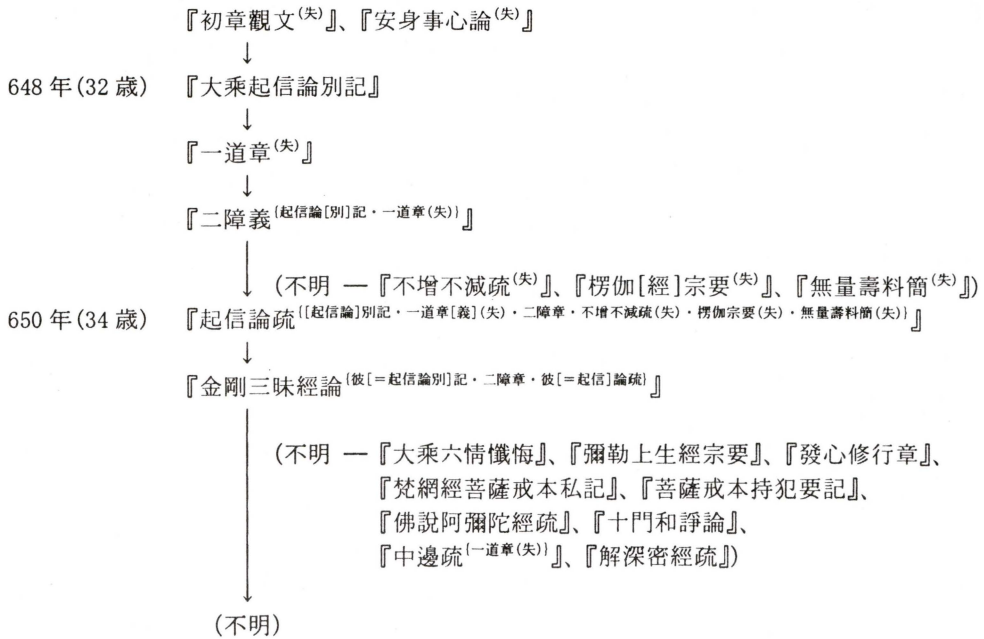
この点については、「第五明教攝門」の訳注において詳しく検討していきたい。

以上、石井・福士両博士の説を継承しつつ、これを再検討した上で、本訳注研究によって新たに判明した事柄を総合し、以下に、元曉著述の著述年次を図式でもって示しておきたい。

図式において、『大乘起信論別記』を六四八年以降の著述にしたのは、本書(T.44 no.1845 p.235c)に玄奘訳(CE.648, 元曉三二歳)『瑜伽師地論』(T.30 no.1579 p.580a)からの引用が見られることによる。また、『起信論疏』を六五〇年以降の著述にしたのは、本書(T.44 no.1844 p.207c)に玄奘訳(CE.650, 元曉三四歳)『大乘廣百論釋論』(T.30 no.1571 p.234c)からの引用が見られることによる。また、『大慧度經宗要』を六六三年以降の著述にしたのは、本書に玄奘訳(CE.663, 元曉四七歳)『大般若波羅蜜多經』からの引用が見られることによる。

⁽¹⁵³⁾ (福士慈稔 [1991] p.643) 参照。

【図 I】元曉著述の著述年次⁽¹⁵⁴⁾



659 年 (43 歳) 〈推定① — 『本業經疏^{(一道章^(失))}』・『法華宗要』〉

663 年 (47 歳) 『大慧度經宗要』

(不明 — 『楞伽經料簡^(失)』)

668 年 (52 歳) 『兩卷無量壽經宗要^{(楞伽經料簡^(失))}』

↓

(不明 — 『楞伽經疏^(失)』)

『涅槃宗要^{(二障義・楞伽經宗要^(失)・楞伽經疏^(失))}』

〈推定② — 『本業經疏^{(一道章^(失))}』・『法華宗要』〉

671 年 (55 歳) 『判比量論』

↓

『華嚴經疏』

↓

686 年 (70 歳) (不明)

⁽¹⁵⁴⁾ 図式中、現存する著述の書名はその内題による。年は著述年時の上限を、() は元曉の歳を、(失) は散逸の著述を、{ } 該当著述のなかで言及する自著を示す。この場合、検索には「具如、中[廣]説、中其義・已具、委悉」などのキーワードが有効である。

なお、『兩卷無量壽經疏』を六六八年以降の著述にしたのは、本書には『法華宗要』における『大悲經』引用の場合と同様に、原典を見ずして『法苑珠林』(CE.668, 元曉五二歳)から引用したと思われる文例⁽¹⁵⁵⁾が指摘できること、また、『兩卷無量壽經疏』よりも『涅槃宗要』において五姓各別説に対する思想的対応の深化が見られるとする藤能成博士の指摘⁽¹⁵⁶⁾に基づき、『兩卷無量壽經疏』→『涅槃宗要』という著述順に推定した。

とくに、『法苑珠林』・『本業經疏』・『法華宗要』には、現行の『大悲經』の經文とは異なり、經文を再編した同文例の引用が見られるため、〈推定① — 六六八年以前〉道世が元曉の『本業經疏』・『法華宗要』を引用した場合と、〈推定② — 六六八年以降〉元曉が道世の『法苑珠林』を引用した場合とを想定し、また『法華宗要』は、明らかに玄奘訳(CE.659, 元曉四三歳)『成唯識論』を知っていることにより、〈推定①〉は、六五九年以降の著述に推定した。

なお、〈推定②〉を『涅槃宗要』よりも後の著述にしたのは、元曉著述における『法華論』引用の時期的な幅を考慮してのことである。

このほかに、著述の先後関係を論ずる判断材料としては不十分であるが、「第二弁經宗」に限れば、『大慧度經宗要』、『涅槃宗要』、『本業經疏』、『判比量論』において、『法華宗要』と一致・類似する文例が見出される。

本訳注研究の特質は、書物が有する思想的な背景を明らかにするために、細部に至るまで徹底して書誌学的な検討を行うという点に尽きる。

ただし、本項(3-4.)本章の場合、『法華宗要』だけではなく、元曉著述の全般を対象にしていたために、上記のような研究手法は行えず、書名を挙げて引用している文例の検討に限ったものである。したがって、著述年次を確定し、これを裏付ける明確な論拠にはなりえないかも知れない。しかも、著者の基本理念(この場合和諍)によって体系付けられた著述全般が対象となると、著述ごとにそのテーマ応じて、著者の恣意的な取

⁽¹⁵⁵⁾ 元曉撰『兩卷無量壽經宗要』に「然鼓音王陀羅尼經云。阿彌陀佛。父名月上轉輪聖王。其母名曰殊勝妙眼等。」(T.37 no.1747 p.126b, ll.20-22)とあり、失訳『阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經』には「阿彌陀佛如來應正遍知。父名月上轉輪聖王。其母名曰殊勝妙顏。子名月明。」(T.12 no.370 p.352b, ll.23-25)と、『法苑珠林』卷第十五・六十には「阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經云。……阿彌陀佛父名月上轉輪聖王。其母名曰殊勝妙顏。子名月明。」(T.53 no.2122 p.399a, ll.16-26・p.736a, ll.1-2)とある。

⁽¹⁵⁶⁾ 「元曉は『無量壽經宗要』においては、五姓各別説を受容し、決定性の二乗の淨土往生を否定しているが、『涅槃宗要』においては、一乗皆成の立場から決定性の二乗を含むすべての衆生の成仏の可能性を認めていたことがわかる。『無量壽經宗要』においては一心の立場に立ちつつも、声聞定性の往性を認めなかったのに対し、『涅槃宗要』では、五姓各別説を相対化しつつ、一切皆成を主張している点から見て、『涅槃宗要』においては、五姓各別説に対する思想的対応が深化したと見ることができよう。」(藤能成[1998] p.135) 参照。

捨選択が反映されていることを常に勘案せねばならず、よって、これをより確実に論ずるためには、内在している思想・内容の面からの考察が最良であると判断される。

以上の諸問題については、今後訳注研究を進めていながら、さらに検討を加えていきたい。とくに、「訳注(3)」においては、日本仏教における『法華宗要』の受容と展開について論じていきたい。

なお、以下の元曉著述の著述年次は、現段階における暫定的なものに過ぎないことを断っておきない。

(2011年2月22日稿)

〈略語〉

(CE, f.)	「Common era (共通年代)、Following (それ以降)」
(NNJ)	「仁和寺蔵本『法華宗要』」
『大正蔵』(T)	『大正新脩大蔵經』
『韓佛全』(HBZ)	『韓國佛教全書』
(SZ)	『新纂大日本續蔵經』

〈参考文献〉(題名に付したアスタリスクは筆者による和訳を示す)

- 金 炳坤稿 [2011] 「元曉『法華宗要』訳注(1)」(『大学院年報』28)
- 横山 紘一著 [2010] 『唯識 仏教辞典』(春秋社、東京)
- 金 炳坤稿 [2010] 「紀国寺慧淨の『法華經續述』考(1) 新発見の史料をもとに」(『身延論叢』15、pp.109-146)
- 林 香奈稿 [2007] 「基撰とされる諸經疏の成立過程について」(『東洋大学大学院紀要』44、pp.232-215)
- 三友 健容稿 [2005] 「義寂撰『法華論述記』の一考察」{村中祐生先生古稀記念論文集刊行会編集 [2005] 『大乘佛教思想の研究 村中祐生先生古稀記念論文集』(山喜房佛書林、東京、pp.117-156)}
- 富士 慈鈴著 [2004] 『新羅元曉研究』(大東出版社、東京)
- 吉村 誠稿 [2004] 「唯識学派の五姓各別説について」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』62、pp.223-258)
- 橘川 智昭稿 [2003] 「元曉と基 真如觀と衆生論」(『印度學佛教學研究』51-2、pp.547-551)
- 崔 鉦植稿 [2003] 「*義寂の思想傾向と海東法相宗における位相」(『佛教學研究』6、pp.33-69)
- 吉津 宜英稿 [2003] 「元曉の起信論疏と別記との関係について」(『韓國仏教学 SEMINAR』9、pp.321-339)
- 奥野 光賢著 [2002] 『仏性思想の展開 吉蔵を中心とした『法華論』受容史』(大蔵出版、東京)
- 藤井 教公稿 [2001] 「天台智顗の『法華經』解釈 如来蔵仏性思想の視点から」{勝呂信靜編 [2001] 『法華經の思想と展開 / 法華經研究 13』(平樂寺書店、東京、pp.351-369)}
- 伊藤 瑞叡稿 [2000] 「法華經における Adhiṣṭhāna の位置と役割について」(『印度學佛教學研究』49-1、pp.282-288)
- 川口 義照著 [2000] 『中国仏教における經録研究』(法藏館、京都)
- 師 茂樹稿 [2000] 「新羅元曉の三時教判批判 『大慧度經宗要』を中心に」(『印度學佛教學研究』49-1、pp.107-109)
- 吉村 誠稿 [1999b] 「玄奘の大乘觀と三轉法輪説」(『東洋の思想と宗教』16、pp.57-79)

- 吉村 誠稿 [1999a]「唐初期における五姓各別説について 円測と基の議論を中心に」(『日本仏教学会年報』65、pp.179-196)
- 藤 能成稿 [1998]「元曉と五姓格別説」(『印度學佛教學研究』47-1、pp.131-135)
- 石井 公成著 [1996]『華嚴思想の研究』(春秋社、東京、pp.191-216)；石井 公成稿 [1983]「新羅仏教における『大乘起信論』の意義 元曉の解釈を中心として」{平川彰編 [1990]『如来蔵と大乘起信論』(春秋社、東京、pp.545-579)}
- 福士 慈稔稿 [1991]「元曉の法華經觀に於ける諸問題」{塩入良道先生追悼論文集刊行会編集 [1991]『天台思想と東アジア文化の研究 塩入良道先生追悼論文集』(山喜房仏書林、東京、pp.637-647)}
- 鎌田 茂雄著 [1987]『朝鮮仏教史』(東京大学出版会、東京)
- 李 鍾益訳 [1987]『*法華經宗要』{元曉全書國譯刊行會編、趙明基監修 [1987]『國譯 元曉聖師全書』巻一(寶蓮閣、ソウル、pp.33-113)}
- 任 禹植稿 [1983]「法華宗要における一乗説について」(『印度學佛教學研究』31-2、pp.647-648)
- 李 箕永稿 [1983]「*法華宗要に現れた元曉の法華經觀」{佛教文化研究所編 [1983]『韓國天台思想研究』(東國大學校出版部、ソウル、pp.41-100)}；弗威文化社編 [2003]『韓國佛教學研究叢書 第52冊 元曉 著述書Ⅰ』(弗威文化社、高陽、pp.487-546)
- 木村 宣彰稿 [1977]『元曉の涅槃宗要 特に淨影寺慧遠との関連』(『佛教学セミナー』26、pp.47-60)
- 一然著、金思燁訳 [1976]『完訳 三国遺事』(朝日新聞社、東京)
- 中村 元著 [1975]『佛教語大辞典』(東京書籍、東京)
- 関口 真大訳註 [1974]『天台小止観 坐禅の作法』(岩波書店、東京)
- 宇井 伯壽監修 [1965]『佛教辞典』(大東出版社、東京)
- 塩田 義遜著 [1960]『法華教学史の研究』(地方書院、東京、pp.330-347)
- 保坂 玉泉稿 [1940]「慈恩撰疏年代考」(『性相』9、pp.10-18)

〈キーワード〉

元曉、『法華宗要』、『法華論』、『法苑珠林』、『大悲經』、如来蔵、仏性、五姓各別説

〈付記〉

「原本」の翻刻及び掲載許可に快く応じて下さった仁和寺の関係者各位、また、申請にあたってご尽力頂いた立正大学情報メディアセンター(大崎図書館)の関係者各位に深く感謝申し上げます次第である。

なお、訓読訳の作成にあたっては、立正大学大学院文学研究科仏教学専攻平成22年度開設科目東洋哲学特講において講読し、担当教員の藤井教公教授(北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻)にご指導を頂いた。また、博士後期課程の研究指導においても担当教員の三友健容教授(立正大学法華經文化研究所長)にご指導を頂いた。記して深く感謝申し上げます次第である。

とくに、「元曉『法華宗要』訳注(1)・(2)」は、「金剛大学校仏教文化研究所招請講演会並びに発表会」(於 金剛大学校 [韓国忠清南道論山市] 2011年3月7日)において、「海東法華經疏の源流」と改題して発表し、質疑応答の際に、金天鶴教授(金剛大学校仏教文化研究所所長)より『法華宗要』の最新のバングル訳注(海住譯註 [2009]『法華宗要』{大韓佛教曹溪宗韓國傳統書刊行委員會出版部 [2009]『韓國傳統思想叢書・佛教編 01 精選元曉』(大韓佛教曹溪宗韓國傳統書刊行委員會、ソウル、pp.117-180)))をご紹介頂いた。記して深く感謝申し上げます次第である。